82
524

026566-000-1

82-524

清国遊歷案内

山口 勗／著

M35

ADD-0240

82
526

序

日清の交通日に益々繁密にして往來懋遷の道愈々暢
を加ふ本邦人士たらんもの深く清國の形勢を知悉す
を要す而して清國の事物に關する著書坊間其數少な
らすと雖通俗平易に清國の事情を叙述し以て當事者
の參考に資するの書物に乏しきは極て遺憾とするこ
ろなり友人山口勗君久く清國に遊び其經歷見聞せる所
を記述して一卷を著し名けて清國漫遊案内といふ卷中
載するところ清國内外各省の地理風俗より運輸交通等

に至るまで之を實驗に徵して綱羅して遺さず而して之を叙する極めて簡潔周到なる筆を以てす實に我邦人にして彼土に來往せんとするものに參稽の好材料を與へたるものにして方今適切の好著なり此書が本邦一般社會に歡迎せらるゝこと知るべきなり聊以て序と爲す

明治壬寅初秋　　西島函南識す

清國遊歷案内

目錄

廣大なる支那……一
高峻なる山……五
深大なる河……九
曠古武功……一四
千里の運河……一四
万里の長城……一五
氣候……一七
物産……一九
蝎の毒……二一
白蛉の襲來……二三

瀟洲の蛞……二二
蟋蟀の戰鬪……二三
風俗……二五
人情……三〇
港灣……三二
開港場……三五
北京……三九
南京……四三
古の長安……四五
古の洛陽……四六
牛莊……四九
天津……五三
芝罘……六六
重慶……六八
宜昌……七三
沙市……七六
漢口……八一
九江……八三
蕪湖……八四
鎭江……八五
上海……八六
蘇州……九七
寧波……一〇四
杭州……一〇六
溫州……一一〇
福州……一一一

厦門……一一二
汕頭……一一四
廣東……一一五
梧州……一一八
蒙自……一一八
長崎より支那……一一九
北京より保定府……一二〇
濟南府……一二〇
太原府……一二一
西安府……一二二
蘭州府……一二三
成都府……一二四
開封府……一二五
安慶府……一二五
南昌府……一二六
武昌府……一二六
長沙府……一二七
江寧府……一二八
蘇州府……一二八
杭州府……一二九
福州府……一二九
廣州府……三〇
桂林府……一三一
貴陽府……一三一
雲南府……一三二
奉天府……一三三

庫倫……一三三
伊犂……一三五
西藏……一三五
鐵道郵便電信……一三七

廣大なる支那

大陸を以て寒帶より熱帶に及べる此廣大なる支那は、東西の直經我一千二百九十餘里、北緯八百里、北緯十八度廿三分瓊州島の崖州より起りて五十度十六分極北の恰克圖に至り、其の間、緯度三十二度を横斷し、東經七十三度噶什喀爾城の西に始まりて、百四十四度若林の島蘇里に至り、其の間經線六十一度に亘る、乃ち北は烏蘇里、墨龍の二大河と亞爾泰山脈とを隔てゝ露西亞に交り、東は日本海支那海に臨み、一部は鴨綠江を限りて朝鮮に接し、南はヒマラヤ山脈に由りて印度、安南、緬甸等に連り、西方一帶、天山葱嶺を以て土耳機斯坦、阿富汗斯坦に境し、面積八十五万三千四百二十二方里ありて、亞細亞の三分一を領し、歐羅巴に比すれば其の一倍半、我邦より大なること殆んど十五倍、人口は四億万、其中には世界第一の山あり世界第一の古代地層あり、世界中に誇るべき長江大河あり、万里の長城あり、千里の運河あり、

此廣大なる支那は世界に於ける古國にして四千年の久しき歴史を有し其間幾びか國號の變遷を來し境域も亦時勢に由りて變更せしこと一再にして止まらずと雖も、現今清國は其の領土を大別して五部とせり、地勢上より之を分てば山地、丘地、平地の三種にして、山地部に入る所は西藏、伊犂、蒙古、雲南、四川、貴州、甘肅、陝西、山西及び滿州の北邊にして、全領土の五分の二あり、丘地に屬する所は、楊子江以南福建、江西、湖北、湖南、廣西、廣東、の各省にして、平地と見做さるるは直隷、山東、江蘇、安徽、河南、浙江の諸省なりとす、

山地部は南西或は北東に奔波する大山脈の傾斜部分にして各大河の水源を定むるの地なれば到る處森林多しと雖も耕作に適する部分も少からず、往々人口稠密なる都府を有し、豊饒の地と稱せらるゝものあり、丘地部は崑崙山脈の南東の支脈に屬する部分にして、雪山の山脈より東南各省に亘り、南部の諸島嶼に終れり、此部分の山脈、傾斜を爲して海に赴くの地は急峻ならず漸を以て蜿蜒し、沿海の土地より內部に通ずる路多からずと雖も、珠江の水域、東西に瀰漫し、物産豊富にして、良港灣を有し、貿易市場多し、平地部は東北の大平原と、楊子江及び黄河下流の流域にして、北は長城より南は荆州府に至り東、楊子江に沿ふて漢口を經て海に至る、杭州府を通じて一線を畫し、總地積三万五千二百万里、人口一億七千七百万、六省に跨れり、地味何れも肥沃にして物産少からず、此の地積にして此の如きの人口は世界にあらじと聞く、此部分のみにても歐羅巴人口の三分の二に當れり政治上の關係より區別したる清國現在の領土は、漢土（支那本部）滿洲、蒙古、新疆（伊犂）西藏の五部にして、其中漢土に十八省を置き滿洲に三省、之に新疆の一省を加へて二十二省あり、其の面積人口左の如し

（東三省及び新疆は未詳）

	面積	人口	一方哩平均
直隷	五七、八〇〇	一七、九三七、〇〇〇	三一〇
山東	五五、五〇〇	三六、二四七、八三五	六五三
山西	六六、七〇〇	一二、二一一、四五三	一八三
河南	六一、三〇〇	二二、一一五、八二七	三六〇

江蘇	三六、九〇〇	二〇、九〇五、一七一	五六六	
安徽	五三、〇〇〇	二〇、五九六、二八八	三八八	
江西	六七、五〇〇	二四、五三四、一一八	三六三	
浙江	三四、七〇〇	一一、五八八、六九二	三三四	
福建	四一、三〇〇	二二、一九〇、五五六	五三七	
湖北	六五、九〇〇	三四、二四四、六八五	五一八	
湖南	七四、〇〇〇	二一、〇〇二、六〇四	二八二	
陝西	七四、〇〇〇	八、四三二、一九三	一一四	
甘肅	一三一、〇〇〇	九、二八五、三七七	七一	
四川	一六〇、八〇〇	六七、七一二、八九七	四二一	
廣東	七九、四五六	二九、七〇六、二四九	三七四	
廣西	八〇、一〇〇	五、一五一、三二七	六四	
貴州	五八、〇〇〇	七、六六九、一八一	一三二	
雲南	一五五、〇〇〇	一一、七二一、五七六	七六	
計	一、三五三、三五〇	三八三、二五三、〇二九	二八三	

千八百九十年の調査に據れば右の外諸開港場に入込みつゝある諸外國人は總數大約一万七千百九十三人にして、中、英國人五千五百六十二人、亞米利加人二千四百三十五人、日本人二千四百四十人、佛國人千百八十三人、獨逸人千百三十四人、葡萄牙人千四百二十三人、西班牙人四百四十八人、瑞典及び諾威人二百四十四人、其餘の外國人は極めて少數なりと云ふ、千九百年の北清事變後、著しく外國人の數を增せしかば、現今は或は此表に倍するものあらん

高峻なる山

喜馬拉亞山は海を拔くこと二万九千尺、其の山脈は蜿蜒として遠く走り、巍々として所々に聳ゆ、低きものと雖も、二萬尺に下らず、走りて中央亞細亞の南堤となり、秀でゝ地球上第一の高峰となり、西部印度に跨るものはガンジス、インダスの両大江の

水源となりて三天竺に濕潤せり、崑崙山は水晶、金星石及び赤色の水瀧石より成れる地層にして、地質學者の所論を以てすれば、喜馬拉亞山に比し、最も古代に成立したるものなりと云ふ、此山脈は亞細亞大陸の脊骨となり、海を拔こと一万五千尺あり、黄河此に發し、長江之より出づ、其他亞再泰山脈は魯領に入りて白令に盡き、高きもの一万尺、天山は一万五千六百尺、何れも雪線を横斷して遙に雲表に聳ゆ霄漢を摩せり

元來地球上に於ける最高の土地と稱せらるゝは、亞細亞大陸の中心なるパミールの高原にして、此高原を概ね西より東に向つて奔馳する山脈の支那全國の版圖を畫するものは、以上の諸山脈にして、喜馬拉亞山脈は南にあり、崑崙山脈は中央にあり、天山及び亞爾泰山脈は北にあり

喜馬拉亞山脈は全長二十四度の間に跨り、廣さ百十里より四百四十里にして、種々に其形を變ず、此山脈を西部中部東部に分てば、西部はカスミルの東端に起りてインデス河の根源となり、中部はチバル高原を組織し、中にエヴヘルスト峰ありて地球上の最高峯となり、中央にダワラキリ峰あり、其東にカンチンゼンガ峯あり、此等の數峯は皆千秋の雪を戴き、白光陸離として映射し、勢ひ狂濤の如く南に向つて馳せて印度の平原に至る、又東部は中西兩部に比すれば、稍々高度を減ずと雖も、チユマラリ峰等著名なるものあり

以上の三部中、中東兩部及び西部の二分の一は、西藏と印度の境界を爲し、其餘の西部は全く印度の境域に屬せり

崑崙山脈は喀喇崑崙山より分支し、西藏高地の北端に沿ふて西より東して夏に支那の疆界に達し、遂に蒙古と支那本部の間を走り、內興安嶺に連續して、滿洲と朝鮮の國界を成せり、此山脈は到る處名稱を異にし、高度も亦一ならず、曰く査薩達班、曰く阿爾金、曰く南山、曰く賀蘭山、曰く陰山、興安嶺、長白山等と云ふもの是なり、而して本部支那の全地を組織する崑崙山系の支脈は、分つて北嶺南嶺の二條とす、乃ち其の北嶺山脈は柴達木原の南境となり、或は巴顏喀剌山となりて黄河の水源と楊子江源の谷地を奔波して岷山と呼ばれ、秦嶺と歌はれ、或は伏牛山と稱せらる、南嶺山脈

は巴顔喀喇より起る横斷山脈より更らに分支して、長江と珠江の水域を分畫し、雲南、貴州、廣西、等を經て廣東、廣西、福建等の各省界を走り、本部支那の東南沿海の地を充たし苗嶺となり、大瘦嶺となり、仙霞嶺等となりて、遂に海中に顯はれて舟山列島となれり

其他横斷山脈なるものありて、西藏の東部、四川の西部より雲南の地を充たして緬甸安南の域内に達せり

阿爾泰山脈は、ヨルチス河水域と、エヂスイー河水域の間に於て、種々の方向を取りて支分する諸山脈の總稱にして、其一は東北の方面を取りて魯領のサヤン山脈となり、バイカルを踰へて、白令海峽に盡き、其一は方向を西より東に取りて興安嶺に接續す、而して其の黑龍江の北岸に連るものを稱して、支那人は之を外興安嶺と云へり

天山々系の魯領に屬するものは之を措き、東部に連る山脈はイシクール江と、塔里木水域を分界し、伊犂部の南北を分つて哈密の東凡そ六十里に至りて盡くる單行山列にして、此等の諸大山系は天然に能く國疆の區畫を成せり

深大なる河

本部支那の大河にして太平洋に向つて注流するもの四あり、東北にあるもの白河、黃河の二とし、南西にあるもの楊子江、珠江の二とす、就中最も濶大なる水域を有するものは、楊、黃二大河にして、最も便益を與ふるものは楊子江とす、此江は世界屈指の大江にして、歐羅巴、亞細亞の二洲に於て之に比すべきものなく、亞米利加のアマソン及びミスシッピーに亞ぎ、而かも水量の多きは宇内第一たり、源を西藏の北部に發して西して巴塘を經過し、轉じて東南に流れ、本部支那に入りて金沙江となり、雲南省麗江府界より東南に流れて蒙番廳を過ぎ、塔子關に入り、鶴慶、大理、姚安武定、昭通、各府の地を經て四川省に入り、復に東北に走りて、湖北の歸州に入り、東南して洞庭湖口に會し、東北に向つて武昌の北を回り、更らに東南に流れて鄱陽湖口に接し、又東北して江蘇の界に達す、其の經過する所は七省二十一府の彊域に跨り、發源地より海に達するの全長凡そ二千八百海里、直經千八百海里とす、其間千仞

の絶壁に觸れては、奔流電の如く激し、両岸の峻嶺、壘障して激湍を掬し、或は三峽巫山の雲雨となり、或は白帝彩雲の歸客となり、詩に、文に、産業に資する所の功、莫大なるのみならず沿岸十一省の生命は繫りて此大江にあり

世人は單に揚子江なる名稱を用ふるも此河は到る處其稱を異にし、雲南より四川叙州府に至るの間を金沙江と稱し、叙州府より以下を總稱して大江又は長江と云ひ、江寧府より下流を楊子江と稱す、宜昌より以下は水勢平穩にして滊船の行駛に便なり、宜昌より以上は急湍險灘なきにあらずと雖も亦舟楫を通ずるを得べし、加ふるに四川に鴉礁江、泯江、及び嘉陵江、涪陵江あり、湖南に洞庭湖あり、湖北に漢江あり、江西に鄱陽湖あり、江蘇に於て南北運河に交り、大小の支流亦枚擧に暇あらず、又其の沿江及び支江には重慶、沙市、宜昌、漢口、九江、蕪湖、鎭江、上海等の開港場あり、江口より上海に至る四十三海里、上海より鎭江に至る百五十七里鎭江より江寧府の下關に至る二百十一海里、下關より九江に至る八十八海里、九江より漢口に至る百四十海里、漢口より宜昌に至る三百七十海里とす、夏期水漲の時は吃水二十尺余の船にして漢口に通ずべし江水の干滿は四時各差あり、大抵支那曆二月より漸々に積漲し、六七月に至り其極に達す、積漲の時に在りては沿江の低處は無數の湖澤となり、洲港は氷中に沒し、圖中の陸地は變じて船舶の上下する所となり、南京より漢口に至るの間は往々二十海里に瀰漫する所あり、此の時に當りて試に四方を眺望すれば、地平線に在る峯巒と、水面に沒せんとする夕陽を認むるのみ、人家は水底にありて蓬窓時に雞犬の聲を聞く、村落を去りし農民は丘岡或は山上に小屋を設けて、以て水勢の退くを待つなり、支那曆の八月に至れば水の減退すること七八尺、農民即ち村落に歸りて耕作に從事す、十二月の交に至れば減水の極度となること毎年大抵此の如し

夏時滿水の時南京に於ては、冬季の水平上より十二尺を增加し、九江に於ては二十四尺、漢口に於ては三十三尺を增加す、滿水當時流水の速力は、南京に於て一時間に三海里、漢口に於ては七海里乃至八海里を走ると云ふ

江口は廣濶にして崇明島其間に在り其口分れて二となる、崇明島は長さ十六里、幅二里より五里にして、世界中沙泥の流游より成りたる諸洲にして、此島より大なるもの

なし、西暦千四百年代以前に在りては尚水底にありしが現今は人口五十餘万の生息する所となれり、島中に大市街あれども海上より見ること能はず、崇明島と吳淞江口の間にも一の沙洲ありて崇寶沙と云へり、之も亦人民の移住するもの日を追ふて増加せり、又江の南口に銅沙あり、年月を經るに從ひ次第に廣濶となり、常に水面に露出する部分の大なるものを暗河沙と云ひ、其の東南凡そ一海里にあるものを瓦剌士島と云ひ、凡そ十二海里にあるものを北島と云ふ、此二島は西暦千八百六十二年に初めて現出したりと云ふ、又東方海上に向ひ百五十海里の處に一の暗洲あり大楊子洲と云ふ、其の質、流下せる沙泥より成りしものにして幅員十五海里あり、楊子江の南口は廣濶にして江に入るの順路たり

楊子江の便益に反して無用の長物視せらるゝ

黄河は、全長凡そ二千五百五十海里、直經千三百六十海里、本部支那の外に在るもの長さ殆んど七百里、甘肅の西寧府界より蘭州に抵り、折れて長城に沿ふて寧夏府を過ぎ、石嶮峻より亂山の内に入り、幾多の斷流に當りて瀑布の狀を爲して所々に落下し、北流する四百海里、陰山に從つて東に轉ずること二百里、大彎曲を爲して再び長城に入り、南流して孟門山下に抵りて、懸流千尺、崩浪激怒す、此處を龍門と稱して黄河第一の險たり、愈々南して潼關を經て河南省の界に入り、孟津を經過して州原地に出で、之より三百五十海里にして海に注ぐ其威を逞ふするに當りては、開封府城の石壁を破りて澎湃として滿市を水底に沒し、二十余万の生民を殲し、或は碟口の隄防を破壞して六十七方里の田園に氾濫し、年々歳々災害を殘すの外、舟揖の便を欠げり

珠江に至りては支那南部の緊要なる大江にして廣州府に因りて夙に其の名を内外に知らる、東江、西江、北江と云へる三江の總稱にして其の水潤の區域は數省に縱横し、面積二萬五千方里、漕運の便、一として之に依らざるはなし

白河は長城外の五郎海山に發して、屈曲して又長城に入り、潮河に會し通州を經過し、天津に抵りて他の三河と合し、太沽より海に注ぐ、舟揖の便凡そ二百海里、直隷第一の河流と稱せらる

滿州に至りては受蘇里江あり、松花江あり、黑龍江あり、遼河あり、鴨綠江あり、

圖們江ありて、或は黄流となり、或は碧流となり、或は松林鬱蒼の沿岸となり、或は洲沙漠々の荒原となり、時としては以上猛烈なる海風起り、白浪崩壊烟霧濛々として咫尺を辨せざることありと雖も、此等諸江は皆能く大船巨舶を入れ又能く漁獲の利を與ふ

曠古の土功

支那に於ける工事の最も誇るに足るべきものは、萬里の長城と有名なる大運河にして一は臨洮に起りて遼東に及び、一は黄河、楊子江を横斷して南北両京の聯絡を通じ、延長両ウながら數百里、其施設の宏壯雄偉、轉た人をして驚嘆せしむ

千里の運河

大運河は浙江、江蘇より山東を經て、直隷省に通ずる一大鑿渠にして全長凡そ三百二十五里、支渠を合せて算すれば又之に倍するならん、之を歐洲有名の運河に比するも此の如き延長なるものは希なりとす、且其の開鑿法能く地勢に隨ひ、水利の適當を得たるは歐人も亦之を賛稱せり、況や創設の時に當りて世界未だ曾て此の如き工事あらざるに於ておや、眞に絶代の偉業を言ふべし、運河開鑿の始めは隋の開皇及び楊帝の大業年代にして、山東直隷の地に於ては衛漳の二水を引きンを永濟渠と號し、楊蘇に於ては山陽瀆を穿つて楊子江に通ず、之を刊溝と云ひ、楊子江の南に於ては京江（今の鎮江）より餘杭に至る、之を江南河と稱せり、之より以後金元明清の歴代相繼き、都を北京に定め、糧餉を南部に求むるに、海路の險を避けて漕運に運河に依り、年々許多の金額を其の堤防及び浚渫に費し、南北漕運の便利大に興れり、支那南部の旺盛を極むるもの偏に運河に基くと云ふも輕言にあらざるなり

萬里の長城

史に稱す秦始皇二十六年、其臣蒙恬をして三十万の衆を率ひ、北、戎狄を逐ひ、河南を收め、長城を築き、地形に因り險を用ゐて塞を設け、臨洮に起りて遼東に至る、延

袤萬餘里、威匈奴に振ふと、惟ふに臨洮は今の甘肅省鞏昌府にして遼東は奉天府ならん、其盡くる所明ならずと雖も、東は遙に今の長城より延長せしならんと思はる、奈何せん年所を歴るの久き、多くは頽敗し其位置も亦現在の長城と異り、百二の秦關殆んど其所を察するに由なく、紫塞過半塵土に沒せらる

現今存在する長城は概ね明代の築造に係れり、直隸及び山西に透迤として數十の關塞を有せる延長五百三十二里の極邊墻三百六十二里の次邊墻は其の最も長大なるものにして、次を陝西の長城とす、東黄河の西岸より起りて甘肅の寧夏府に接す、延長二百四十五里、又嘉峪關より起りて金塔寺堡に抵り、或は烟墩溝より起りて所々に轉じ、紅水堡より黄河索橋に至りて止るものあり、又蘭州より涼州府界に接する長城あり、新邊墻、衝邊墻と稱す、新邊墻は黄河索橋より起りて、莊浪衛界の土門山に至るの間を云ひ、衝邊墻は黄河西岸に沿ふて、蘭州府の北を繞り、涼州の界に至る、共に明の萬歴年間に築造せしものなり、其外寧夏府に屬する長城あり、或は山脉に據り或は河流に界し、斷續して邊防をなせしものなり之等甘肅の長城は延長凡そ六百二十一里あり、

氣候

支那は土地廣大にして地勢も亦異るの故を以て一樣に言ふこと能はざれども、概して之を言へば、沿海の地を除き、内地に至りては我國同緯度の地方に比すれば、寒暑共に甚しく、又俄に變化を生じ易し

凡そ北緯三十五度より以北の地は、十一月より三月までは、寒氣連續し河水凍結す、然れども降雪は多からず、三十五度より二十四度の間は氣候稍々温和にして著き變化あることなし、一年中平均華氏五十九度の候にして極熱の時と雖も八十二度を出てず二十四度以南の地は冬の温度は平均華氏の三十八度四十五分にして、極めて温暖なる時に於て六十度に上ることあり、夏は平均凡そ八十二度に至る、春甚だ短くして、夏最も長し、其降雨の時は四月より十月に至る、恒信風は此沿海地方に在りては、印度の如く劇烈ならずと雖も、七月より九月の間に及んで南方の沿海に起る颶風は實に恐

るべきものなり

北方は春秋の二季甚だ短く、夏冬稍々長し、故に其寒暑は六ヶ月交代にして寒冷は十月より三月に至り、温熱は四月より九月に至る北京は北緯四十度に在りと雖も其暑熱北緯三十八度の地に同じく寒冷は北緯七十一度の地に同じ、其至寒至熱を以て之を平均せば中數五十三度三となり、四月九日を以て此平均中數の日とす、又最高の平均は八十度二にして、七月廿一日を以て此中數に當る日とす、十月十八日亦降りて五十三度の中數に復す、十一月下旬氷點に至り、三月下旬解氷す、嚴寒の時は四度五分に降り極熱の時は九十七度三にあり、北京の風候は日中より旦暮に多し、而して冬時は正南正北不偏の風多く、且つ塞外より吹來る風は寒冷殊に甚し、夏期四月より九月の間は、南風及び東南風或は西南風多く、降雨は七八の両月最も多し

上海に在りては夏時の温度は一年中の平均五十度にして、炎熱の度は八十度とす、廣東は平均六十八度、澳門は七十度にして、炎熱の度は八十二度とす、

物産

物産に就ては各要地の部に夫々記載したれども、概括して爰に支那物産中の重要なるものを擧ぐれば、第一は稻米にして山東、河南、江蘇、浙江、安徽、江西、湖南、湖北の八省に產し、年々北京に漕運するもの四百萬石に下らず、直隸、山西、陝西、甘肅及び東三省の地方は麥、粟、高粱あり、次に茶は支那固有の植物にして黃河と楊子江の水域に屬する各地皆之を產す、是れ支那物產と大宗たり、之に次ぐを蠶絲棉花漆とす、製造品は布帛に次で砂糖、紙、桐油、茶油、豆油及び塩等とす其他、藥材、麝香、鹿茸は西部及び東北の山地に出で、浙江に釀造する紹興酒、山西の汾酒、滿州の高粱酎等も亦需用頗る廣く、蒙古、滿州の產物たる獸皮、獸骨、羽毛の類之に次ぐ、礦物に至りては石炭最も多く、英人の調査に據れば支那の北部の地に於ける炭田は凡そ八万三千方英里ありと云ふ、金は直隸、甘肅、四州、雲南、廣東、廣西の地に產し、銀の出產は又最も多く、一歲中大約一千一百萬両を出すと云ふ、錫、水銀、鉛

等も亦諸所に多し

大なるものは大なる地に產す、支那に於けるものは日本に於けるものより概して大なり、支那人の体格は獨活の大木然たるもの多く、言ふ迄もなく我よりも長大なるが、家屋も亦大なり、其の建築は粗放にして精巧ならざれども、規模の大にして堅牢なるは、小刀細工流の本邦家屋に比すべくもあらず、動植物の中、最も目立ちて大なるは支那人の愛養する蓋にして我が產に比すれば約三倍大なり、日用蔬菜類に至りて茄子も大なれば蕪も大なり、此二ッのものは我が南瓜大なり、一日天津にて同人相會して談適に之に及び、此南瓜大の種子を日本に送りて小粒の臍を拉がん哉とて一笑したることあり、支那人の用ふる茶碗、箸、其外の器具も亦一樣に日本のそれに比較して小なるものなく、一として尨大の支那を表さざるはなし

更らに少しく注意すべき毒虫の事を記して渡淸者の一顧を望まんとす、其の一は蝎にして次ぎは白蛉、及び蜢、臭虫等なるが臭虫（南京虫）は人も既に知る所なれば暫く措き他の三者に就て之を述べんに

蝎の毒

蝎と云へるは大さ蜻蛉大にして其の羽に代ふるに小蟹の夾を以てしたるが如し、形ち蝦に似て蟹の如き夾二個を有し、尾端の上方に彎曲したる針を有す、此針は蜂の劒の如く頗る鋭にして物、觸るれば忽ち尾を曲げて一擊を加ふ、此毒虫は多く煉化石の空隙に入りて土中に生息し夏期に至れば蟄居を出で、夜間に至りて食を求めんとして徘徊するもの〻如し、濕氣のある所及び煉化石壁に據りて機を待てり、人若し之に螫さる〻時は全身水腫狀となりて九死の重体に陷ることあり、古來支那人が蛇蝎と並び稱して恐怖するは之が爲めなり、被害の部分手足に止れば生命に憂なしと雖も腰部以上に及べば殆んど全く治療の方法なしと云ふ、在天津日本共立病院の藥劑生某は浴場に在りて、其の襲擊を受けて狼狽したることあり、醫員も未だ研究せざる新患なりとて切開療法を施したりと聞く

然れども去りて支那人の言ふ所によれば、被害の患部に向つて直に吸出すを以て最良

の治療法とするもの〻如し、然らざれば蜘蛛を捕へて之に吸出さしむべし、蜘蛛は喜び極りて己れ死するに至るまで吸居ること甚はだ妙なりと、言ふに至りては支那人の阿片を飲むに似たりとて一笑するものありしが、蜘蛛と蝎とは、蛇と蛞蝓との間係と同じきが如く、死したる蜘蛛にても尙効あり、幸ひに生きたるを得ず、交代して吸出さしむべし、毒氣の殘留する間は離る〻ことなしと云ふ、或は又鷄卵の白味にて洗ひ其後ち之に塗るに阿片を以てするも一法なりと云ふ、注意すべき事にこそ

白蛉の襲來

白蛉は蚊よりも小にして白き羽を有す、晝間は暗處に屏息し、夕暮より出で〻蚊と同じく生血を索めつ〻飛去り飛來りて屢々異鄕の客を驚かしむ、此虫は蚊よりも毒氣多きものと見え、螫されたる跡の痒きこと一方ならず搔痒の爲めに滿身負傷の狀を呈することあり、其害臭虫に劣らず、而して形の至小なるが爲めに蚊帳を出入すること自在なり、日本在來の蚊帳は白蛉に對して甚しく防禦の具たらず

滿州の蜢

蜢は我が稻子麿にして螽斯に類し、背尖り兩角列び、雄は長き一寸、雌は三四寸あり綠色なるあり褐色なるあり、背後より尾に至りて其の色赤く、飛ぶときは內羽黃にして美なり、滿州は嫩江以西の山野に此蜢最も多く、晴天にして風なき時か、若くは雨後に殊に多し、行客此處に至れば常に盧帳を張り、帳の口を開き、蜢の來りて悉く此中に飛入るを待ち等を以て之を撲殺し、而して後ち始めて飲食するを得べし、馬牛を螫せば血流れて全躰盡く赤し、偶々馬の逃したるを深草の間に求むるとき、蜢の集り山の如く高きを見れば、必ず其の螫死せられたるを知り、之を棄て〻顧みざるを常とす、土人は蜢を防ぐに樺の油を以てせり

蟋蟀の戰鬪

曾て羅馬人が人と人と相戰はしめ、人と馬と、人と牛とを戰はしめて歡呼して之を見

物したる古へより、世界各國生物の爭鬪を見て喜ぶの例少からず、我國にても伊豫の鬪牛、土佐の鬪犬、其他諸所に鬪雞等の流行したること一ならずと雖も、未だ蟋蟀の鬪爭に賭するものあるを聞かず、天津に於けるコホロギの戰鬪會は有名なるものにて山東より山西より峽西より其他の所より、勇壯なる蟋蟀所有者は恰も自家の馬匹を競馬場に出すが如き意氣組にて、西より東より皆天津に來りてチャンピオンを爭ひ、万金を賭して悔ひざるが如し、定日前は愛養する蟋蟀をして日々戰鬪を習はしむ、元來蟋蟀は小き土器に入れ置き、寒きときは懷中に容れ、暖かきときは之を出し、別に一蟋蟀を小竿の梢に括り付け、之をして土器中の蟋蟀に向はしむ、土器中の蟋蟀は見て直ちに戰鬪し、竿頭の逃ぐると同時にコロ〳〵と凱歌を奏す、即ち勝敗は其の凱歌に由りて分明なれども、夫が爲め賭者の大爭鬪を引起したるより李鴻章時代に之を嚴禁したりと云へり、然れども今尙ほ其の跡を絶たず、爲めに財産を蕩盡するものもあれば、俄大盡も出來りて、意氣揚々たる傍らには悄々として見るに忍びざるものあり、其の愚笑ふべきが如しと雖も鬪雞、鬪牛皆同じ因に山東省の蟋蟀最も勇敢にして所謂

北方の强なりと云ふ

風俗

支那の人種は固より黃色人種に屬すれども、之を細別するときは十餘種あり、苗人種漢人種、蒙古人種、滿洲人種、回々人種等は其の重なるものにして、風俗も亦各々異る所あり、就中雲南貴州の地方に住する苗人種に於て殊に然りとす、此民族は古代江淮の間にありて、漢人種を困めたる有苗にして、今は熟苗、生苗の別あり、熟苗は朝延に歸順して耕作を業とするも、生苗は未だ王化に服せず、軀幹强健にして皮膚赤黑住居は木造にして斧斤を加へず、修飾を施さず、綿布を着し、麥稗、雜蔬を食とするも、間々、鳥獸昆虫を食するものあり、其の他の人種は風俗畧ぼ同じく、清朝以來男子は前後左右の頭髮を剃去し、頂上の髮を打辮して背後に垂れ、長きを以て益々美觀とす、女子に至りては漢人種は多く足の小なるを以て美觀とし、少小生育の期に於て之を緊縮して長大ならしめず、成長の後、其の足恰も獸蹄の如く屈曲して殆んど行步

すること能はず、而して男女共に手爪の長きを誇る風あり、處女の幼なるものは髮を長くし打辮して垂下し、未だ嫁せざるものは前髮を分け、既に嫁するものは鬢角を剃除して額を開くが故に一見して其の室家たるを知るべし、又男子は四十歳を越ゑざれば鬚髯を蓄へずと云ふ

支那人の家屋は貧富に應じて其の構造を異にするも、其の種類は瓦房、灰房、土房、木房及び舟居穴居等の別あり、瓦房、灰房、土房は北方に多く、木房舟居は南方に、穴居は山西陝西の地にあり、山下を穿つて累々家を成せり、古代の遺風と知らる、舟を以て家とする者は、舟上に花園或は家猪雞羊の園を設くるものあり、木材を結束して筏の如くし其の上に家するものは、筏上に泥土を置きて蔬菜を種るものあり

屋内は中央に内庭を設け周圍に各室を作り、南面するものを正房とし東西の両室を東廂西廂と稱す、故に内庭より各室を窺ふべし、普通外より入る第一の室は來客應接の處とし及び男子の食堂とす、是より内に在るものを一家共用の室とす、戸口には帳帷を垂れて容易に其の中を窺はしめず、各室必ず寢臺あり、上に蓆を鋪き褥を設く、以て腰掛となすべし、以て横はるべし、以て阿片を吸ふべしとなす、

支那人は又た子親伯叔兄弟皆一家中に同居するを以て、最も雍穆の厚きものとし、世人も之を稱揚ずれば、政府も之を褒賞す、而して男女別あり、然かも其區別は甚だ嚴格にして坐するに席を同ふせず、食するに卓を同ふせず、女子十歳に至れば兄妹と雖も席を同ふせず、遊歳を共にせず、手づから物を授受することなし

家政は家長の專制にして、殆んど無上の特權あり、故に主人の威力を以て子女を賣り或は各自の私有物を處分し、或は己れの罪科に代らしめ、或は妻妾を以て負債の抵當とするに至る

冠婚葬祭は支那人の最も重ずる所にして、古來より男子十四五歳に至れば加冠の禮あり、女子は加笄の禮あり、青年に達して婦を迎ふるは双方唯父母の處置に任すの外、毫も自己の意を以てすること能はず、固より嫁娶の前に面識あることなく、媒介者あり て彼我父母の間に奔走して約束すること、恰も甲の牧牛者が乙の牧場に至りて牝牡を撰びて配合せしむると一般、當事者は此間に在りて殆んど動物以上の働きあること

なし、大抵双方同一の家格に因りて定まり、既に婚姻を了り三五日を過ぎて、新婦其の生家に歸り父母を見て、後ちに婦は全く其夫の所有物となり、或時は擔保となり、或時は賣買處分せらるゝことあり、是れ實に惡風なり、而して惡風は獨り此のみにあらず、女子は人の妻となりて其の夫及び舅姑に仕へ柔順ならざるべからずと云へる善良の教へに甚しき弊害を生じて、夫死すれば殉死し、舅姑病に罹れば肉を殺ぎ骨を削り、藥に和して食せしむる等の慘事あり、此くの如きは政府も旌表の典を行ひ、鄉黨も艶羨す、中には婦人の赤誠より出づるものゝあるべしと雖も、往々强迫して死に至らしむるの惡弊あり、殘忍も亦極まれりと云ふべし

惡風は尙之よりも甚しきものあり、西藏に於ては一妻多夫の惡習慣ありて、公然一個の婦人にして數人の男子に配せり、此惡風の結果として同地方は人口年々減少の傾きありと云ふ

葬祭に至りては亦極めて嚴密の法式あり、父母死すれば先づ其の死体を哭し、次て死体を洗淨するとき又哭す、而して後ち之に生人の如く衣服を纏はしめ、木棺に納め、

小牌を作りて死者の名稱を記し三七日の後、初めて埋葬の禮を行ふ、此時彼の小牌を捧げたる者、棺前に行き音樂を奏し、紙にて作れる人形を持つて之を送りて墓前に至る、又毎年春秋二期に祭式あり

支那人の食物は品類甚だ多く、東南各地に於ては稻米を食し、西北各地は粟、麥、高粱の類を食す、北部の白菜は鹽菜として南部に輸出す、肉類は牛豚を主とし、鳥魚亦甚だ多し、支那人は總て熟食を要する風習にして、其の用法甚だ博く、殆んど一科の技術と爲し、其の術も亦精巧に達し、調理の巧なること英人の上に出で佛人の下に在りと云ふ、山海の珍味としては、熊の掌、燕の巢、魚鰭、海參、海蜇の類を尊重し、兼て脂肪多きものを愛用せり、其の食事するや、輪坐椅子に倚りて飯臺を囲み、竹木乃至象牙にて製作したる箸を用ゐ、寒冷なるものを食せず、燒酎する尙之を温め、渴を醫するに茶を用ふ、街頭に在りて酣飲の爲め踉蹌として歩行するものなしと雖も、若夫れ一たび烟館子（イエンコワンツー）裏頭に至れば、鼻水を滴らし、白沫を吹き、鼾聲を弄して華胥に遊ぶもの、累々として然り、貴となく賤となく、支那全國を擧げて益々衰亡に近

かしむる恐るべき阿片烟は、實に到る處に其の害毒を流しつゝあり、都會の地には此烟館殊に多く、其外酒樓、妓園料理店多し、烟草及び鼻烟も亦支那人の最も好む所にして、鼻烟は粉末を鼻孔に附着して、以て其の香氣を嗅入するものなり

人情

十人十色、世に觀察の難き未だ人情を察するの難きより難きはなし、米人エチ、スミス氏の如きは二十二年間支那に在りて專ら其の氣質を研究したりと稱するも、而かも尙隔靴搔痒の感なくんばあらず、吾輩曾て支那人を論じたることあり、曰く其人や驕慢にして自ら尊び、虛式虛禮を以て輕薄心を修飾し、强に降り弱を凌ぎ、古文明を追懷して柔弱に流れ、保守獨り喜び進取の氣象に乏しと雖も、勤勉力行、堅忍不拔なるに至りては、世界萬國未だ曾て此國人の如きはあらざるべし、若夫れ支那人にして支那人を最も能く代表したる者を歷史上に求めんか、六國を打つて一丸とし、書を焚き儒を坑にし、俗人の欲する所の慾望を充たして遂に己れ自らも長生を欲し、不老不死の仙藥を東海に索めたる秦始皇其人なりと云はざるべからず、古を尊び今を卑ひは支那人の氣質なりと云ふと雖も、彼等をして一たび慾を充さしめよ、彼等は始皇たらざるも必ず耳目を驚すものあらんと、蓋し此の國は古昔より制度文物盛んにして、土地人民の富饒なること他國に超越せしを以て、自負尊大、他を蔑視し、禮節を重んじ、德行を修め、仁義の敎義二千年に涉りたれども、名利を貪るの心、極端に達し、狐疑となり、譎詐となり、淫虐となり、上下を通じて天性劣質に變じ、殘忍にして愛憐の心少きに至る、始皇の儒を坑にし、白起、降卒四十万を屠にしたる如きは特に然りとす、現今沿海の人民難破船の貨物を掠奪して意とせざるが如き是なり

更らに淸人の浮誇にして徒らに表面を衒ふの一例を擧ぐれば、記者の下僕某の母、寡居して數子を養ひ、裁縫を業とし、僅かに生計を營むと聞き、余は特に友人に囑して其の服を仕立てしむ、之が爲めに友人は寡婦を訪ふこと両三回に及べり、適々一支那人余に來り余が僕を指して曰く、彼が母は貞を守りて寡居するものなり、幸に日人をして見舞はしむる勿れ疑を惹きて德を傷け、情に於て忍びざることありと、余以爲く

婦蓋し美にして艶ならん、清人の面かく余に囑する所以のものは或は妬心に出でたるにあらざらんやと、何ぞ知らん其の居る所は棟割の貧乏長屋にして下等の清人男女群居し、寡婦と云へるは登徒子が妻と見紛ふばかりなる醜婦にして年齢も四十六歳なりと聞き、益々其の表面を衒ふの甚しきに驚けり、彼等の古代には天知る地知る我知る子知る、何ぞ知らざることやあると言ひし清廉の士もありしが、今の清人は人にさへ知られざれば如何なる悪事をも敢てするの風あり、一方には寡居して徒らに貞を衒ふの婦人あれば、一方には姦夫と共謀して良人を毒殺するの姦婦あり、良人の處置に憤怨して自殺するもの屋上に登りて有らん限りの聲を絞りて良人を罵詈するもの、或は門頭に立つて良人攻撃の演説を試み、殆んど乎の付け様もなき婦人の風儀なるに尚ほ且つ貞を唱へ節を稱す、果して之を唱へ之を稱するの能力ありや疑はしきものなり

港灣

支那は其の面積の廣大なる割合に海岸線は長からずと雖も東、朝鮮の境界なる鴨綠江口より西の方、廣東省の極端なる欽州に至るまで大約一千里餘あり、其の形勢は不規則なる半圓形にして其の名稱は黄海、東海、南海と分れたり、乃ち閩粤諸省の海を南海、臺灣海峽以北楊子江口に至るまでを東海、其れより以北直隷、盛京、山東諸省一帶の海を黄海と稱し、黄海の北部廟列嶋以内を北海と云ひ、又渤海と云ふ、而して其の北に灣入するものを遼東灣、西に入るものを直隷灣と云ふ

其の間碇泊に便なる灣港一再にして止らず、と雖も其の著名なるものを擧ぐれば、遼東灣に在りては、營口、直隷灣に在りては天津とす、去りて山東半嶋に至れば北岸に烟臺あり、其の東に威海衛あり、港の前面の劉公嶋は百尺崖と共に日清戰爭に由りて其の名高し、又去りて南岸に至れば、膠州灣あり、灣口廣さ約一里にして東南に面し、其南面最外の突角を曹家嘴と云ふ、上に雙峰あり、海岸は此處より曲接して西に向ふこと數里、轉折北に向つて大灣を成せり、今より凡そ百年前に開けたりと云ふ、黄海南部の最大港は上海にして、東海北部の大港を寧波とす、寧波の南に臺州灣あり、海上數里を隔てゝ臺州列島あり、二大島と十小嶼とより成り四里半の長さあり、其間に

淺灣をなせるもの名けて臺州灣と云ふ、灣首は即ち椒江口にして江の南岸に海門衛の城壁あり、湖江四里にして二支に分れ、一は二十四海里にして臺州府に達し、一は西南に向つて黄巖縣に至る、椒江口以外は退潮のとき水深凡そ八尺、江内は二十四尺より三十尺に至る、吃水十二尺に過ぐるものは、滿潮にあらざれば河口を行進することを能はず、此邊は潮の干滿十八尺より二十尺に及ぶを以て、潮流を利用すれば巨船と雖も台州府に至ることを得べし、台州灣の南を温州灣とす、其の南を福州港とす

南海に属する北首に泉州灣あり、祥芝角と崇武所との間を灣口とす、廣さ約ね五里、港の北岸を距る二里餘に大墜、小墜の二島あり、小墜は低矮にして植物なく、大墜は三百五十八尺、附近の島嶼中に於て最高なるものなり、西面より洛陽河口に至るに廣濶なる沙洲あり、靴沙と云ふ、泉州府は洛陽河の東岸に在り、河口を距ること遠からず、人烟塡咽亦屈指の一府たり、泉洲灣の西南に隣するは、即ち厦門港にして、其の南に銅山港あり、此港口東岸にある福爾峰は高さ九百三十尺にして形ち馬鞍の如し、西岸は嶋嶼相對し、石礁遠く伸びて海中に入る、上に銅山鎭の城垣あり、此間水路両岸暗礁多し、銅山の内澳は廣しと雖も、航路は甚だ窄しと云ふ、此港の西を汕頭とす其の西に海門灣あり、高峯を距る東北三里半の東門角内にあり、水深約三十六尺より四十二尺あり、其の西に廣州港あり、珠江の北岸にあり、珠江の西南を澳門とす、澳門の東南面に陸地あり、泊船の處を沙灘と云ふ西面は退潮のとき水深十八尺にして東面と三角嶋の間に近けば深さ二十七尺より三十尺あり、此港は明代なり外國貿易繁盛の地たりしが、廣州其他の諸港を開きしより大に衰へ、現今は葡萄牙人の外、各國人の居住するもの次第に減少せり

開港場

以上記載したる港灣の内條約港は概ね河港に属し我が開港場と大に其の趣を異にせり河港とは譬へば利根川に沿へる關宿、信濃川に沿へる長岡の如き有樣のそれよりも極めて大なる港の河岸にあるもの〻稱にして支那の如き廣濶にして深大なる河流を有する國に在りては海港よりは寧ろ河港の實用切にして、數十ヶ所の開港場の中、最も重

要視せらるゝ貿易場は皆彼の江河の沿岸にあり即ち芝罘を除くの外營口、天津、上海鎮江、蕪湖、九江、漢口、宜昌、重慶の如き其他東海南海に瀕せるものと雖も一二島嶼中にあるものゝ外何れも然らざるはなし、此の中長江沿岸の漢口の如きは江口を距ること五百八十哩、宜昌は之よりも上流四百哩、重慶はなほ之よりも上流四百哩にありて上海を距ること大約一千四五百哩の間は常に滊船上下の通路たり、上海とても長江の入口とは云ふものゝ、其の實長江を溯ること約四十八哩にして吳淞と云ふ所に達して、それより左りに折れて更らに吳淞の江を溯ること十三哩の上流にあり、尙此等の港が我國の横濱神戸などゝ同じからざる所以を述ぶれば、彼の廣東の如きも海口より八十二哩の奥に在り福州は馬尾港の上流三十五哩、上流の河岸にあるを見ても支海の港灣が如何に我が港灣と其狀を異にするかを察すべし

以上何れも外國人の入込むべき港灣にして貿易市場たるもの大小通計三十ヶ所あり、次に掲ぐるは千八百九十九年の調査に係る人口と輸出入表なりとす

開港場	人口	輸入	輸出
牛莊(盛京省)	九〇、〇〇〇	五、二七九、一八五	八、六九三、一四一
天津(直隸省)	一〇〇、〇〇〇	一四、二五五、二〇九	一〇、八七一、五三九
芝罘(山東省)	四〇、〇〇〇	六、五三九、七七一	二、〇七五、三七三
重慶(四川省)	三〇〇、〇〇〇	四四〇、四六一	六、一五五、〇一七
宜昌(湖北省)	三四、〇〇〇	一二、二三〇	
沙市(仝上)	七三、〇〇〇	六九、七五八	二、四〇〇
漢口(江北省)	八五〇、〇〇〇	一、〇九五、七〇二	八二五、七一六
九江(江西省)	五五、〇〇〇		
蕪湖(安徽省)	八五、〇〇〇		
靖江(江蘇省)	一四〇、〇〇〇	一、一五三、八〇八、二九一	九〇、九三七、四七六
上海(仝上)	六一五、三〇〇		
蘇州(仝上)	五〇〇、〇〇〇	四、三二四	

寧波（浙江省）	二五五、〇〇〇	八九五、三〇四	一九、三八五	五、八六九、〇五五	三十八
杭州（仝　上）	七〇〇、〇〇〇		五、九八五、八四四	一、三七六、六七六	
温州（仝　上）	八〇、〇〇〇		一三、六〇二、一二九	四、五二四、八三六	
福州（福建省）	六五〇、〇〇〇		一三、三一四、九四八	二三、九〇〇、四四七	
厦門（仝　上）	九六、〇〇〇		一三、八六一、九九五	一、八四五、七二〇	
汕頭（廣東省）	三八、〇〇〇		四、〇七六、二二七	二、一四二、二一八	
廣東（仝　上）	八〇〇、〇〇〇		二、五一〇、二六一	一、六五九、〇〇〇	
梧州（廣西省）	五二、〇〇〇		二、四四三、三六四		
廣州（仝　上）	四〇、〇〇〇		七四、四九三	一一、一四三	
パコイ（仝　上）	二〇、〇〇〇		三、三七三、六四一	一、八八三、六四一	
龍州（廣西省）	二三、〇〇〇		一七一、四三二	四二、四六二	
蒙自（雲南省）	一二、〇〇〇				
思茅（仝　上）	一五、〇〇〇				

北京

支那の國都、北京は東經百十六度二十八分、北緯三十九度五十七分に位し、白河の西南六里半、河口を距ること五十五里の沙原中に在り周圍十里九丁十二間にして、人口凡そ百十八萬

此處は遼、金、元、明以來の都城にして、現今の城廓は明の永樂十九年の建築に係れり、城廓内を二區に分ち、内城外城とせり、内城は方形にして、外城は稍弧形を爲せり、城壁は石を礎とし煉化を以て造らる、高さ三丈五尺五寸、雉堞の高さ五尺八寸、址の厚さ六尺二寸、頂の廣さ五丈、周圍六里七丁三十六間、四面皆門あり、南に正陽崇文、宣武、東に朝陽、東直、西に阜成、西直、北に安定、德勝門あり、城門の上には瞧樓あり、城門の三面に角樓あり、覆ふに綠琉璃瓦を以てす、遠く之を望めば光彩映輝す

内城は八旗に區畫せらる、八旗人常に此に居住して皇城を護衛す、内閣以下各衙門及び各國公使館等皆此區内に在り、此處は初め八旗人に限り居宅を許せしが後來漢人の移住する者も亦增加するに至れり、毎門内皆一條の街衢あり、之を大街と云ふ、其の左右の小街を衚衕と云ふ、大街は總て商鋪にして家屋櫛比せり

外城は内城の南部を覆ひたる長方形の一區にして、城壁の高さ二丈、雉蝶の高さ四尺、址の厚さ二丈、頂の闊さ一丈四尺、長さ四里二十五丁三十八間あり、内城に比して稍小なり、南の三門を永定、左安、右安と云ひ、東を廣渠、東便と云ひ、西を廣寧西便と云ふ、門樓角樓亦内城の如し、此外城は明の嘉靖四十三年增築する所にして本と内城を四周するの目的なりしが工費の重大なるに由りて一部に止れり、此内に二條の大街あり、南北に通ずるを正陽大街と云ふ正陽門外より直に永定門に至る、此街路最も大なり、東西に通ずるを廣寧大街と云ふ、共に賣買盛んにして内城に勝れり、天壇、先農壇、祈年殿等祭祀に供するの堂宇あり

皇城は内城の内を更に區畫し煉化を以て之を甃し、女牆の高さ一丈八尺、址の厚さ六尺五寸、一面の長さ十一丁五十間あり、黄琉璃瓦を以て之を覆ふ、亦四門あり、南を天安、東を東安、西を西安、北を地安と云ふ、天安門の内に電門あり、端門と云ふ、其の東を闕左門と云ひ、西を闕右門と云ふ、天安門の外に又女牆を繞らせり、其正中を大清門と云ひ、東を長安左門と云ひ、西を長安右門と云ふ、天安門は五闕にして上に重樓あり環らすに河水を以てし、石橋五を架す、尤も觀美とす、皇城の内に大廟社稷等あり

皇城の西に苑池あり、西苑と稱す、池あり大液池と云ふ、南北半里余東西二百歩、池中に在る瓊華島は松檜森鬱たり、其南に瀛臺あり、林木森蔚、蒼翠滴んとす、石橋所々に架せらる、神武門の外に女牆を繞らせし所あり景山其中に秀で〻滿城を瞰下すべし、山頭五峯を爲し高さ凡そ百五十尺各峯頭に小亭あり登臨最も可なり

紫禁城は皇城の内にして皇帝の宮殿此内に在り、方形にして南北六丁三十間、東西八丁二十四間五尺あり、城壁は赤色を以て之を塗り赤瓦を以て之を覆ふ、高さ三丈にして址の厚さ二丈五尺、頂の厚さ二丈二尺一寸、雉蝶の高さ四尺五寸五分、四面に門あ

り、午門、東華西華と云ふ而して、北を神武と云ふ、午門は三關にして上に重樓を架し、左右に鐘鼓の門樓あり　翼するに兩觀を以てし、傑閣四聳す、皇居は正中に在り大和、中和、保和の三殿を外朝とし、乾清、交泰、坤寧の諸宮を内庭とす、其他數多の宮殿及び花園等あり、一千九百一年九月記者皇居を拜觀するの榮に接し、大清門を入りて大和、中和、保和の三宮殿を拜して更らに乾清門を入り、乾清、交泰、坤寧の諸宮を拜せしが、當時皇帝西安に播遷し、禁城空しく外人に委し庭所々に雜草の枯れたるを悲み、神武門を出で萬感を疊みて歸路に就きしが爾來數月、皇帝回鑾あり大液の水、景山の亭、亭を繞る松の風光更らに新なりしならんと想はる

北京城濠の水は北京の西數里の地玉泉山より發し、東して長河となり高梁橋を經て内城の西北隅に至り、分れて二流となり一は城北の外濠を繞りて朝陽、東便の二門を過ぎ、通州に入りて白河に會し、一は水關より内城に入り大液池に入り紫禁城の護河となる

天津を經て、北京に入るものは其婦人の纏足を見來りて滿洲婦人の風姿の佳なるに接し、惆悵の思に堪へざるもの多し、結髮の風も又大に異り、稍々日本舊時の片外と云へる結髮に似たるものあり

南京

江寧府は江蘇省の首府にして、明代に於て北京に對し、南京と稱せしを以て今尚ほ之を南京と稱せり、北緯東十二度五分、東經百八十度四十七分に位し、楊子江の左岸に在り、鎮江を溯ること四十七海里にして、上海より漢口、重慶等に到るの航路たり、周圍十三里三十一丁十二間にして人口四十萬あり

城壁は高さ五丈より七丈に至り、下部の厚さ三丈とす、外部に城濠あり、總て明の洪武年間に於て創建する所なり、元來此都は舊帝都たるを以て、其規模廣大にして甚だ繁盛の地たりしが、咸豐年間長髮賊の占領する所となりしを以て、一時其の三分の二まで荒蕪に歸せしと云ふ、然れども有名なる左宗堂が總督たりしとき大に家屋を建築せしめ、人烟更に增加するに至れり、府城の東北角に聳ゆる鐘山は地を拔くこと約七

百尺、其北端より連亘する丘阜を覆舟山と云ふ、城壁は其の丘陵上を蜿蜒し、走りて獅子山に至る、之を府城の西北角とす高さ大約三百尺、其西に連るを珠山と云ふ、高さ百尺あり、城壁其下を繞る両山の間に儀鳳門あり、門外の市街は下關と云ひ楊子江より南京に進むの埠頭にして人烟稠密せり、又南門外に雨花台あり、高さ百四五十尺あり、頗る遊賞の勝地と稱せらる、之に登れば城中一帶を俯瞰すべし、金陵機器局は此山下にあり、山下、山上俯仰古今を觀すれば吳の孫權の都せし建業の當年より二千年間の興亡歷々指掌すべし、殊に今より凡そ五百年前、明の太祖朱元璋が泗洲の一夫より起りて意氣山の如く、風霜烈日威を海内に加へ、功業を全ふして豪氣を埋めたる孝陵は高閣依稀として僅に其の形貌を存し人をして坐ろに當年を追懷せしむ

市街は自ら北京と其風習を異にし、家屋の構造閑雅にして佳良の市店多し、綢緞絹帛を製すること甚だ精工にして書肆帛舖等大なるもの少からず、元來此地は文華風流の地にして文人墨客甚だ多し、

氣候は夏時炎熱甚しく七八月の交は帳幕の下に在りて寒暖計九十九度、夜間は九十度に下るも氣候不良するに因りて病に罹る者多しと云ふ

古への長安

陝西省西安府は近年北京朝廷蒙塵の地として偏く人の知る所となりしが是れぞ即ち古への長安にして周室、王畿の地たり左は函谷關及び崤山の險に據り表するに太華終南の山を以てし右の方褒斜谷及び隴首山を界として繞らすに黄河涇渭の川を以てし、衆流會合して其の西に洶湧せり、華實の草は九州の肥沃を証し防禦の固め天地の險區と知らる、戰國の後、秦皇天下を一統して關中と稱したるは此處なりとす、爾來漢、晉、西魏、後周、隋唐、皆此地に都したるを以て名所舊跡極めて多し、未央宮址は府城の西北二里にあり、武帝の柏梁は朽廢し、呂氏の宣室は草離々たり、石渠は圖書を藏し、天祿は書を按すべし、麒麟、凌烟には功臣を畫きしこともあれど今や空しく雲烟、長樂、建章の二宮址、太液地、井幹樓、興慶宮、沈香亭、徒らに古へを追想せしむるに過ぎず、府學にある石經は希世の異寶と稱せられ、慈恩にある雁塔は唐時の古

剎として其名高く、玄都の桃、章臺の柳、滿城所として感慨ならざるなし、古遊賞の地としては府南に杜曲あり、樊川に韋曲あり、樊川は樊噲の食邑たりしなり、水に渭水、鎬水、滻水、潏水あり、山に龍首山、終南山、太一山あり、又杜牧が昭陵を望みし樂遊原は府南にあり、其の南方十三里に子午谷あり、咸陽縣の東四里、渭南の上林苑中に秦皇の築きし阿房宮の宮趾あり、苑中に昆明池あり、上林苑と共に荒廢せり、馬嵬坡下泥上中、空しく貴妃の跡を吊ひ、驪山に至り滑かなる温泉に浴して今昔を知り、華清宮、長楊宮の跡を見ては轉た滄桑の感を深からしめ、鴻門坂に當年の豪傑を喚び、抗儒谷に始皇の暴行を察し、去りて秦嶺を望めば雲は今も横はり、滿都の風物一として詩腸を斷たざるなし、古への長安は眞に人生の長苦を記するの歴史たるに過ぎず

古への洛陽

古へより崤函(長安)には帝王の宅あり、河洛は王者の里たりと稱せられたる河南省河南府は古への洛陽にして洛水に面し四方朝貢の道程均しきを以て周成王都を此に遷し大に城垣を築きて諸侯を朝するに始まり、天子は舊の如く長安に居りしも平王に至りて、犬戎の逼近を憂ひて東遷して洛陽を居城とす、降りて漢高祖も一たびは洛陽に都せしが四面敵を受くるの地勢なるを以て長安に都し、東漢の光武皇帝も亦此處に都し隋の煬帝の都するに至りて大に土木を起して宮室を營み、洛陽の面目を一新せり

試に古代洛陽の隆盛を極めたる狀況を知らんと欲せば、張衡か東京の賦を見るに若かず、曰く王城は曲面の勢を度りて、洛に向ひ河に背き、伊を左にして瀍を右にし、西の方、九坂の道を阻てゝ、東の方、坂形周屈の于旋に門をなし、孟津其の後に達し太谷其の前に通じ、太室の山は鎮となり、底柱の山は流を止む、召伯此を卜して洛に食み、周公初めて基を開く、巨猾王莽の神器を弄ぶに及びて、光武之を怒り、乃ち龍の如く白水に飛び、鳳の如く參墟に翔け、斧鉞を二十八將に授けて妖氛を掃ひ、區宇の治まるを待つて洛に都し、明帝に至るに及びて宮殿を新にし、德陽殿を作りて應門の將々たるを立て、崇賢門に仁惠を昭かにし、金商門に義聲を顯はし、或は春路に雲

龍門を作りて、勢ひ飛ぶが如くし、或は秋方に神虎門を置きて象魏の両觀を建て、以て六典の舊章を旌はし、八達九房天地に法り、濠龍の池、芳林の苑、芙蓉は水を覆ひ秋蘭は岸を被ふ、西の方、少華に登りて之を臨めば、長亭短亭整々として連り、含德章臺、天祿、宣明、温飾、迎春、壽安、永寧の諸宮殿は飛閣神の如く殆んど形容することを能はず、孟春元日に至れば群后四方より來りて天機を伺候し、藩國は聘を奉じ、要荒は質を來らし、贄を執りて玉を献ずる者數萬、列して二行となり、鴻臚寺の諸官次に坐を占め、郎將階を司り、虎戟鉾を交ゆ、龍墀庭に滿ちて雲旗霓を拂ふ、夏正には三朝に庭燎を晳晳たらしめ、洪鐘を撞き靈鼓を伐つ、聲、八鄙に震ひ、雷霆の迅風に激するが如し、是の時に當りて鶯蹕を稱して彫輦を東廂に下たし、通天を冠し玉璽を佩び、皇祖を紆ふて干將を帶し、玉几を左右にし穆々として南面す、其体、皇々焉たり濟々焉たり、將々焉たり、信に天下の壯觀なりと、然るに今や落漠、空しく市店の櫛比するのみ、古人亦莫洛城東、今人却對落花風、滄桑の變、驚くべきものあり

牛莊

通常人の牛莊と稱するは遼河の下流にある營子口にして、牛莊は此處より尙上流十五哩の所なるに、何時の頃よりか言ひ習はしけん一般に營口を以て牛莊と稱するが故に今暫く其の稱呼に從へば、牛莊は北緯四十度五十二分、東經百二十二度八分の地にありて、遼河の左岸に位し河口を距る十三哩、渤海の北端に臨み、海路天津より二百七十哩、芝罘より二百十一哩、我長崎より五百五十哩あり、往時にありて此地は一般に遊牧民の居る所にして皆天幕を張りて生活し其の天幕の小團結を窩棚と稱せしが其の形一見軍營を連ぬるに似たるを以て營子の名起り、又其の地に一の潮水溝ありて退潮のときは干溝となり滿潮のときは海潮進入するも爲めに其窩棚を害することなきにより即ち沒溝營の稱起りしものなり、所くて道光三年頃に至りて往々民舍を設けしものありて遂に小部落を爲し、降りて西暦千八百五十八年天津條約によりて開港場となり同治の初年各國爰に互市を初むるや鎮海營を置き辨兵を駐屯せるより別に又

鎮海營の稱起れり、斯る土地なれば咸豐年間にありては盜賊横行して頗る不穩なりしが盛京將軍崇實が五千の兵を置きしより漸く其跡を絶ちて平穩に歸し爾後年々歲々輸出入の貨物も增加し、毎年數百萬を以て算ふるに至る

遼河の港口は往昔にありては今の營子口の上流三十海里の白華溝と稱する所にありしも、爾來河底の年々埋沒して大船を容るゝこと能はざるに至り、遂に營子口の上流二十海里の右岸にある田莊臺に移りしが、此地亦埋沒して更に營子口の上流十五海里の左岸にある、興隆臺に移りしも亦漸く埋沒したるを以て道光三年に至り今の地に移れるものなり、而して此營子口には人家約三千、人口四萬、其市街は分れて二となり、上流即ち東にあるを東營子と稱し、海城縣の管轄に屬す、外國人居留地の鎮海營は此地に在り、下流即ち西にあるを西營子と稱す、蓋平縣の管轄に屬し、土人の市街是なり、土人の市街は豪家軒を接すと雖も外國人居留地は之と比す可きにあらず、而して此東西營子は人家連續して河流の左岸に沿へり、是より南蓋平縣に至る八里の間は廣漠たる水濕の荒地にして下流は総て泥澤ならざれば鹹鹵の荒地たるに過ぎず

營子口の下流二海里の所に東弓灣と稱する所ありて人家凡そ五十戸あり騎兵及び步兵を駐屯せしめ提督駐劄して之を管せり、又下流三海里にして西弓灣と稱する所あり河流彎回せり、此處に雞爪子溝あり、營子口を下ること即ち五海里の右岸に在り、又更らに下流五海里にして長さ六十六尺、周圍凡四百九十五尺の長方形を爲せる海岸砲臺あり、遼河の年を追ふて埋沒すること前記の如くなるを以て。今營子口も遂に永く其位置を保つこと能はざるに至るべく、將來の埠頭は漸く雞爪子溝たるべしと云ふ

抑も營口の地たるや卑濕低原、一望極りなく、附近に山岳なく丘陵なく樹木も稀れにして河水は混濁甚しく飲料水も甚だ佳ならず天然の愛すべきものなく、毎年十一月下旬より三ヶ月間は河水氷結して全く交通杜絶するに至ると雖も、其位置は獨り滿州の中心都會たる奉天府の咽喉たるのみならず東は鴨綠江岸に、東北は吉林、黑龍江両省に、西北は內蒙古一帶の地に通じ皆雜穀を積來りて其の歸途は藍其の他の貨物を積みて歸るを常とするが故に冬季車輛の出入毎日數百千輛の多きに至る、加之支那內地船舶の南方より來るものも頗る多く、毎週數回芝罘、上海等に流船の便あり

近年に至りて露國の經營に成れる東清鉄道は、山海關に於て津榆鉄道と連絡し、其結果牛莊は鉄路遠く各地に連り、水路は旅順芝罘天津等の要港と對し、水陸交通の便開くるに從ひ益々其の繁盛を增し、將來最も屬望すべき要港と見做さるるに至れり

我日本郵船會社は數艘の汽船を以て毎月數回、釜山仁川芝罘等を經て本港に寄港し、商船會社も亦北清に新航路を開くと云へば我國人の來往は一層其便を增せしならん

北清事變後我國人の牛莊に入るもの稍々多く、旅店料理店さへ設けられたり

重要輸出品は太豆、豆油、豆餅、人參、毛皮、金、烟草藥材等の類にして輸入品は鴉片、棉布、海產物、砂糖及び雜貨類なり、商買の大なるは油房にして最も大なるもの二十戸に及び、毎戸雇人百餘名牛馬百餘頭ありて毎年五六萬兩を賣買せり、又製鹽場あり蓋平縣の管轄にして所々に收稅局を置き、取引は營子口に於て行はれ仲買千餘人あり、雜穀を積來りし各地の車馬は必ず鹽を積みて返るを常とす、此地には海老魚及ひ其脂に食鹽を加へ小なる瓜の類を漬みたる介味の品あり、各地に輸出すると云ふ、鑛物の如きも將來大に輸出せらるゝに至るべし

天津

天津は北緯卅九度四分　東經百十七度三分に位し、白河と大運河の合流点にありて、獨り直隸省の咽喉の地たるのみならず、山東、山西、峽西の諸省より蒙古一帶の貨物は、概ね此處を以て集散の地とし、此處を記するに稍其詳なるを加ふるは、因りて以て北清諸港の狀況を察するに足るべければなり

支那人の著書に據れば、天津は二千年以前は僅に海岸の一漁村たるに過ぎざりしが、大運河の開鑿ありしより漸次繁華の地となり、獨り地理的の變遷のみならず、政治上の關係も亦隨て生じ、明の太宗の時代より一層重要の地區と認められ、政治機關の設備を見るに至れり其後清の世宗第三年に郡となり、同九年に府となり、一廳三縣を支配すること〳〵なりしが、初めて貿易市場となりしは文宗の咸豐八年なりとす

咸豐八年(西暦千八百五十八年)天津條約に因りて貿易市場となりしより、俄に其繁盛を增し、航海の期節たる三月より十一月迄の商業取引の頻繁なる有樣は、白河の中に

連る船の十哩より十數哩に及べると、河岸に立働く數千の苦力と、河岸に堆積せる貨物の夥しきを見れば、問はずして其一班を窺ふことを得べし

天津市街(支那人街)は長さ約三哩、中約二哩にして白河の河岸に沿ふて又細長き市街あり、天津城の内外を通じて樞要の地と稱せらるゝは、城内の十字街路の兩列と北門外一帶にして、城北に至りては鍋店街估衣街の一部、並に東門外の宮北街なりとす、北門外一帶は海產物綿布等の問屋多く、鍋店街、估衣街も亦富家豪商多く住居し、宮北街は多くは小賣商なれども甚だ殷賑なり

道路は幅員二三間に過ぎずして、人馬の往來に困難なりしが、聯合軍の占領後城壁を破壞して巾の廣き道路を作り、舊北門より運河に及び、續いて白河の右岸に沿ふて、佛國租界のハンドロードに至るまで、六十呎の道路を作りしが、是唯周圍に止まり、街衢の裡に縱横馳走するものは、依然五呎の舊態を改めず

家屋は一樣に支那風の建築にして、磚瓦房、灰房、土房の三種あり、煉瓦造りにして屋根の瓦なるものは磚瓦房、屋根の石灰なるものは灰房、全體總て泥土より成りしもの之を土房といふ、斯る家屋の櫛比する間、所々に聳然として堂塔の秀でたる光景は外國人に一稱の感を與ふるもの〻如し

○外國人居留地　は天津城の南方に當り、天津停車場の前面に對して洋館の甍を列ねて、別段に盛觀を呈するの邊一帶にして、總稱を紫竹林と云ふ、天津に於ける外國貿易は重に此處に行はる、外國人の有力なる銀行會社も亦概ね此處に在り

○日本居留地　は去る明治廿八年の馬關條約に因りて設定せられたるものにして、支那街の東南隅にして各國居留地中最も其の西北に位し、山口街、福嶋街、秋山河岸熊本町など〻名付られたり、面積は三十萬坪なれども、泥沼の地多くして埋築工事を施すべき場所は、五萬五千立方坪あり、其他護岸工事を施すべきもの二百間、道路二千間、是等の工事の爲めに今後二十年を費すとすれば、早くも明治三十七年に至らざれば、居留地の体面を備ふること能はざるべし、目下我國人は紫竹林の英租界と、專官居留地の一部開口といへる支那街に在り、其戸數は二百、人口千二十七人あり、中に女子二百人

○貿易の趨勢　は年々増進する間にありて、今日は我國實に其主位を占め、重要品の中、棉布、棉絲の如きも、既に從來主位に在りし印度英國產を壓し、海產物は殆んど專賣の姿となり、諸雜貨類も亦漸く其主位を占んとせり、直隷山西より蒙古の門戸七千有餘萬人の大得意を控へたる、此天津は我國人の大貿易場にして、最も多望なるが故に、此際銳意此事に從はざるべからず、最近の統計に據れば千八百九十九年の輸出は、八十八万三千八百三十三両、輸入は三千九百四十万九千二十九両にして、其品名は棉絲、棉布、摺附木、石油、昆布其他の海產物茶、砂糖、枕木、漆器、陶器、銅器、等なりとす、又輸出品の重もなるものは獸皮、獸骨、毛類、大豆、麥稈眞田等なり

○天津の通貨　は元寶銀、（馬蹄銀）小銀、銀票、墨銀、北洋圓銀、小銀貨、銅錢、錢票等にして元寶銀は純位九九二と稱するも、實際九八〇位に過ぎず、小銀は馬蹄銀の小形なるものか、又は銀の小片にして補助貨なり、銀票は一種の兌換券、元寶銀と引換へらるべきものなれば、發行者の信用次第にして流通の狀況も異れり、北洋圓銀は即ち一圓銀貨にして、墨銀と混用し、之を補助するに小銀貨を以てす此外に銅錢ありて現今尙盛んに流通せり、銅錢には制錢と大錢との區別あり、現今實際に使用するものは大錢にして、制錢は空稱に屬すれども、通常貨物の價を定むるには制錢を以てせり、乃ち大錢一文は制錢二文に相當すると云ふより、錢取引は都て稱高の手數に當る錢を受授すること〻なれり但し取引の都合によりては大錢若干と定むる時は、其稱高と同數の錢を受授するは勿論なりとす、而して銅錢は九十六文を一緡とし、之を大錢百文と稱し、五百文は五緡を一括として之に八文を加へ合計四百八十八文を以て大錢五百文とし、之を制錢一吊文即ち一千文と稱して通用せり

○銅錢と墨銀の相場　は幾分か上海相場の影響を受けざるにあらざるも全く獨立の相場にして、去る三十一年一月より翌三十二年三月までの平均相場を見るに、墨銀一弗に對する九十六津錢の相場は、最高の時は千八百文にして、最低の場合は千六百文なりし、又津金一両に對する津錢相場は、最高の時が二千五百三十文にして、最低の時は二千三百四十二文なりし

○金塊　は滿州及び蒙古熱河地方に產し、重に各地商人の北京に行くもの〻齎來る所に係る、其品質は九百八十位を最低とし價格は近年最高の時は重量拾兩に付き三百七十一兩にして、最低の時は同量三百三拾四位を下らず

○天津に於ける外國銀行　は横濱正金銀行、香港上海銀行、喳叮銀行、露清銀行獨逸銀行及び中國通商銀行の六行にして營業時間は午前十時より午後三時迄なれども其間十二時より二時までは晝食時間として閉扉するを以て、一日僅に三時間の執務に過きず、爲換相場は近頃、日本參着最高七十八兩四分の三、最低七十兩二分の一なりとす

○天津に於ける交通運輸　の機關として郵便電信滊車滊船の狀況を畧叙すれば、郵便は電信と共に支那政府の公業となり其の郵便局は稅關の支那を受けて海關道臺の監理に屬し局員の重もなるもの及び局長には外國人を聘用すれども電信局は北洋電報總局の監理に屬して局長及び技手は皆支那人なりしかば事變に際して郵便局は從前の通り事務を扱ひしが電報局員は皆逃亡せしに依り佛國軍隊の占領する所となれり清國郵便料の徵收は現金收納にして受信人より之を納めしむ其の賃錢は天津と北京及び通州間は一百錢(約我五錢)天津と豐臺間は二百錢(約我十錢)にして里程に依り便否によりて一ならず

外國人は概ね自國の郵便に依れり我が邦人も亦然り目下天津にある外國郵國便局は佛蘭西、獨逸、露西亞、及び我日本の四ヶ國にして我郵便局は領事館の邸内にあり開口に出張所あり切手賣下所を數ヶ所に設けて本國と同じく爲替貯金及び小包郵便等の取扱をなせり

電信は諸外國人共北洋電報電總局に依頼せしが事變に際し局員盡く逃亡せしより丁抹人ポーセンなる者天津太沽間に私線を布設して大東大北電信會社と特約を結びて私電局を設立せしが此電報料は天津太沽間一語拾仙にして太沽より諸外國行は萬國電報料に據れり

○鐵道　は白河の河口なる塘沽より天津迄二十七哩あり、其設計は廣軌道にして津輸鉄道と云ふもの是なり、天津より北京に向つては楊村、安定、黃村、豐臺を經豐臺より

分岐して保定、正定等の處に達し、一方は塘沽より唐山を經て山海關に達し夫より以往は東清鐵道となり牛莊旅順に至り奉天齊々洽爾等の處に至ることを得べし、其賃錢塘沽と天津間は二等九十五錢、天津北京間は三元五錢、山海關と塘沽間は五元四十錢、北京山海關間は九元四十錢にして、一等は其五割增、三等は其の五割減とす、發車時間は午前午後通じて二回あり

○白河の今昔　白河は六七年前迄は、滿潮の時は天津附近にても水深十一二呎ありて、七八百噸の滊船は天津埠頭まで容易に溯航することを得たれども、四五年前より河身に泥沙游積し、其結果非常に水深を減じ、僅に五六呎の所さへ生じて滊船上航の跡を絶てり、爾來出入の船舶は太沽口を溯る凡そ五哩の左岸なる塘沽埠頭に繫泊するに至りしは、二三年前より白河の河口太沽にも亦沙泥の游積を來し、著く水深を減じたる爲めに、塘沽附近に相應の深さあるにも拘はらず、八九呎以上の船舶は太沽バーを上航するを得ざるに至れり

○海運に就て　は中々興味のあるを覺ふるなり、現今に於てはジャーデンマゼソン商會(怡和洋行)、招商局、パッターフィルドスワイヤー(太古洋行の外、我が日本郵船會社等の滊船が、天津の海運權を擅にすれども、これ等の大會社が太沽に入りて悉く少小なる太沽解會社の左右する所となり、船客及び貨物の積卸しに就て、屢々專横なる處置を受け、渺茫たる濁浪中に連日空く碇泊して損害を受くること少からず、太沽河口は海潮干滿の差甚しく潮流の急なること一時間六哩、大潮に際すれば八哩に及ぶことありて潮候不良なれば出船することを能はず、加ふるに本船は視力の届かざる遠方に碇泊し居るが故に解會社は、常に堅牢にして且つ大なる解船を使用せり此解船は何れも鐵製にして噸數は五六百噸より二千噸位に至り大概の貨物は一回に積取るを得る程なれば引船小蒸氣も亦頗る健快にして中には三百馬力を有するものあり斯く設備は各滊船會社の客易に實施すること能はざる所なれば扨こそ處に此一小解會社をして專横ならしむるなれ

○日本郵船會社　は明治十九年三月韓國經由の北清航路を開始せしより佛商フイリップ商會(美昌洋行)に天津代理店を托せしが明治三十四年に至り初めて其の代理を解

きて出張店を置き別に神戸天津間の直航路を開けり而して韓國經由の定期船は釜山、仁川、牛莊、芝罘等を經過し、直航は神戸下の關より長崎を經て芝罘に寄港し、直に天津に通ふことゝなり、交通甚だ便なれども今來に至るまで、太沽に於ける舟船の設備なくして、彼のライターコンパニーの放縱に委し、爲めに不測の損害を受くるは邦人の遺憾とする所なり、神戸より太沽迄の乘客運賃は一等六拾圓二等四拾圓三等貳拾圓なり

○市街の運搬　は馬車、荷車（此内に二輪車と單輪車とあり）人力車（東洋車）苦力等なるが、就中二輪の荷車を以て最も輸送力あるものと見做さる、最も奇觀なるは冬期結氷後に於ける白河河上の橇なりとす、此橇は結氷中の交通機關にして船頭の仕事に屬せり

○天津城　は西暦一千四百五年即ち明の太宗の頃に初めて築造せられ今を去ること五百年前の建築なれども其後白河の氾濫に際して屢々浸水し屢々修理を加へたる爲めに壁の厚さ三十呎に達し高さ二十五呎にして頂面を蔽ふに煉瓦を以てし其の空隙を塡、ひるにセメントを以てし外方に向つて銃眼を穿ち東西南北に四ヶの穹窿門を設け雄偉宏壯なりしが列國聯合軍の爲めに尽く破壞せられ今は唯だ方形の道路を紀念として舊觀を一掃せり

○學校　李鴻章が北洋大臣として時めきし當年經營せられたるものゝ中にて一際目に立つものは學校なりとす、武備學堂を初めとして北洋大學堂、北洋醫學堂、電報學堂貢院、育才館等あり、此諸學校は北清事變に際して殆んど休業同樣となれり、此事變の後邦人の手に依りて生れ出でたるもの二校あり一を日出學館と云ひ一を天津科學館と云ふ、二校共に清國子弟を教育するを以て目的とし、程度は内地の尋常中學にして卒業期を三ヶ年とす、現在生徒は日出學館に八十名、天津學館に二十八名あり

○日本共立醫院　は閘口にあり、明治三十四年の設立に係る、院長を會田道之助と云ふ

○新聞社　は從來日本人の手にて國聞報なるものを發行せしが、同社は義和團の變亂に際して建物に甚しき損害を受け、其儘廢刊するに至りしかば、現今天津にて邦人

の手に成る新聞紙は天津日々新聞のみ

○旅館　外國人居留地には天津ホテル、アストルハウスホテル、クリヤランスホテル、ビクトリアホテル、ホテルデスコロニース等あり日本專官居留地には日本ホテル芙蓉館、芝廼舍等あり就中日本ホテル最も可なり、宿料は一泊金二圓五拾錢

○料理店　開口に於て最も繁昌するは料理店にして八軒あり、金城館、㊤、大坂樓日本亭、來々園、高砂、東雲、花月、是なり、二十餘人の藝妓、三十餘人の仲居、中々多忙なりと云ふ、西洋料理は日本ホテル及び芙蓉館にて營めり、支那人の西洋料理にて有名なるを愛樂園と云ふ、又開口には手輕料理屋あり、「みなと」、「入り船」と云ふ、辨當屋として評判あり

○日本倶樂部　は明治三十四年十月創立せらる、場所は宮北街の玉皇閣内にして北清在留の日本人を以て組織し、同國人間の親睦を圖るを目的とせり、現今會長は伊集院彦吉氏にして幹事は岩崎直英、森井國雄の二氏なりと云ふ、

○天津の名所　は行宮、龍亭、穀樓、海光寺の堂、天后宮、文廟及び其他の寺院等

にして、行宮には美觀を極めたる木彫の裝飾あり演舞場あり、曾て光緒皇帝の行幸せられんとするに當りて增築せられたるものなり、龍亭も皇帝のタブレットとして設けられたるものなり、海光寺の堂に至りては歴史的趣味ありしものなりし、即ち千八百五十八年ロールドエルージンと支那全權大臣との間に締結せられたる天津條約の調印せられたる所なりしも今や既に空しく、其敷地は日本兵營となりて、日夕唯喇叭の聲と佩劍の鏘々たるあるのみ、獨り蕭然として天津城の名殘を止むるは舊城内の眞ん中なる鼓樓にして、古へ警報を傳ふるが爲めに設けたるものなりと云ふ、

○天主堂の廢物　は白河と大運河の合流点を前に控へ、舊水師營に隣接したる形勝の地にあり、煉化石造にして高く聳ゆ、淺草の十二階と趣を同ふし數里の外より尙望見することを得べし、此堂は千八百六十一年英佛聯合軍の天津を陷れたる後、佛國の占領紀念として經營せられたるものなるが、其後千八百七十年支那人の逆殺によりて破壞せられ、義和團の爲めにも亦最も注目せられたり、乃ち彼等は暴行の第一着手として此堂を破壞したり、平定後修理復舊せられたれども其損害は夥しかりき

○侯家後　は城の北門外より東北隅にまで及べる一帶の総稱にして閘口より北西約三十町、殆んど一直線なり、此處は肉体的の娯樂場として知らる、料理屋、飯屋、藝妓屋、芝居、貸座敷等総て支那的の魔窟にして夜間最も殷賑なり、

芝罘

芝罘は古の奇山所にして一名之を烟臺と云ふ、山東岬の北方にありて北緯三十七度三十三分、東經百二十一度に位し、天津より海路二百四十五浬、長崎より四百六拾九浬上海よりは五百十浬、仁川より二百七十二浬にして、仁川へも天津へも一晝夜を要せずして達し、長崎と上海へは二晝夜にして達すべし、日本郵船會社の北清航路は其の韓國經由のものと否とを問はず必ず此地に寄港し、以て天津及び牛莊に赴くことゝせり、一千八百五十八年天津條約に由りて貿易市場となりしより漸次其の繁盛を加へ、年々二千萬両内外の輸出入あり

地勢東北は渤海に臨み、北西南の三面は丘陵連亘して障蔽を爲し、芝罘嶋を以て港を形くり、潮水深く、港懐濶く、大船巨舶の繫泊に便なり、

冬季は北風凜烈、波濤の洶湧甚しきことありと雖も、北清の通商港中唯一の不凍港にして且つ氣候も風景も共に宜しく、海濱は海水浴に適するを以て、夏期遊覽避暑の客頗る多し

山東省は物産寡少にして民力も殷實ならずと雖も、地理的より之を觀れば興味少からず、濟南府には古へ虞舜の耕せし歷山あり、韓信の齊軍を襲ひし古戰場あり、泰南府に至れば屈曲盤道海拔六里の泰山あり、東嶽となり岱宗となり、東峯、中峯、西峯となり、東峯にありては日觀と稱して雞鳴に日出を望むべし、泰觀と稱する中峯にありては遠く長安を望むべし、越觀と云へる西峰にありては會稽を望むべし、東西の二天門は明月嶂と云ひ、登仙臺と云ふ、山下の三溪は東西中の三方に分下し　懸崖の瀑布に白鶴泉と云へるあり水簾泉と云へるあり、山麓に明堂の址あり、此山は古昔帝王封禪の址と名士登覽の題詠と甚だ多く、古來名勝の地にして秦松　漢栢　最も著名なり、

去りて更に兗州府に入れば、洙水、泗水の二水あり、二水の間は孔子の居りし所、尼

丘山あり、叔梁紇の顔氏と共に禱りて孔子を生みし所、顔母山は此山と相對し一帶の風光盡く孔聖の遺跡ならざるなし曹州府に入れば、濮州の東に姚墟あり、舜の生れたる所、曹縣には戚姫村あり、漢の戚夫人此地に生る、孝子村あり孟昌宗の股を割い母に進めしの所、更らに去りて青州府に入れば太公望の封ぜられたる古地として跡の尋ぬべきもの少からず、要するに名所舊跡の如きは勝て記すべからず

輸出入の重要品は荳餅、荳油、野蠶絲、繭調、草帽纏（以上輸出品）鴉片、棉布、絨布、金屬、石炭、石油、昆布、魚翅、鮑魚の類是なり

重慶

重慶府は古の巴の地にして周の巴子國、秦の巴郡の域に屬し、隋唐之を渝州と稱せり、宋に至りて始めて重慶府と稱し、元、明、清皆其稱を襲用せり、其位置は北緯二十九度三十分、東經三十三度にあり、四川省の東部に於ける一大舊都會にして、楊子江の上流千四百哩、嘉陵江北より來りて江に注く處に在り、古來巴蜀一大阻と稱せられ、今は四川省及び西部支那地方の外國通商の關門にして、前途最も有望の開市場たり

抑も西部支那なるものは、四川、雲南及び貴州三省の通稱にして、其の人口凡そ九千萬と稱す、就中四川省は清國第一の大省にして面積八萬方里、人口七千萬を有すと云ふ、南は雲南、貴州に接し、西は西藏に界し、北は甘肅、陝西に鄰し、東は中部支那の湖北省に連る一省にして、其の大さ夏に我帝國全版圖の面積人口に超越せり、而して氣候温暖、山嶽四圍、河流縱横、土田肥美にして物として產せざるはなし、農產は米を以て主とす、品質佳良にして本邦產に讓らず產額亦饒多にして年稔れば之を他省に輸出するに至る、大小麥、豆、玉蜀黍等の雜穀は以て省内の民口に供給するに足り砂糖は多額を他省に輸出し烟草は香味共に佳良にして其名全國に高し、又生絲及麻を產すること多く、古來著名なる蜀錦、巴緞等の織物を製織し、近年又生絲、繭を外國に輸出し、茶は陸路に依りて之を西藏の各部に供給す而して數年來阿片の植栽非常に增加し、今や本省第一の物產と爲り年一年に外國阿片の販路を侵畧せり、其他蔬菜、

果實の類は種類の夥しき產出の多き價格の廉なる驚くに堪へたり、藥材は本省重要產物の一にして他省に輸出す、加ふるに四面に海を見ざるに鹽井は混々として食鹽を出し下流諸省に供給し、鑛物に至りては管に金鑛の存在するのみならず銻鑛も到處に存在し、石炭の如きは運輸不便なるが爲めに未だ十分に採掘せざるも、其の富饒なるに至りては外國旅行者をして一驚を喫せしむるものあり

重慶府は此くの如く面積廣濶、民口衆多、產物豐富四川省の外國通商上唯一の門戸となり、楊子江の上流、諸大川會合の燒點に位し、貨物集散上天然の利便を享有せり、抑も楊子江は前に述ぶるが如き源を西藏の高原に發し、南下して雲南省の北部を貫流し、北折して四川省に入り、先づ其の西部を縱貫する鴉龍江を併せ、敘州に至りて本省の中央部及首府成都を經過し來る岷江を併せ、瀘州に於て沱江を合し、府の東南門外に於て東部諸川を湊合し來る嘉陵江を併せ、東して涪州(重慶府下)に至り、貴州省より來る、武江を呑み、重山層嶺の間を馳せ、三峽の險を過ぎて中部支那の平原に灌漑すること滔々數百里、終に海に注ぐ、其の海口より千哩の間に六個の開港場を有して滊船を通じ、其より上流は大小各種の支那船を通せり、而して前記の諸江流亦概ね舟楫を通じ、當府の近傍に於て合流するを以て、木府は衆山擁蔽の中に在りて優に灌漑漕運の利を享け、獨り四川省內豐富の物產を吸收するのみならず、雲南、貴州両省の貨物及び甘肅、陝西、山西の北部諸省の貨物をも吸收し、下流諸開港場及其他の諸市邑と呼應して之を彼に輸し、彼の產物及び外國輸入品を運致して、更に之を四方に轉運す、西部支那の出入集散は此地に依るもの多し、宜なり古來吳楚の上游に據り雲貴の形勝を占むと稱せられ、更に巴蜀の咽喉成都の肘腋等の稱あるをや

輸出入　の統計的に見るべきものは單に稅關を通過する外國輸出入品に止まれども千八百九十一年此地が始て貿易市場となりしより逐年增加し大に長足の進步を爲せり輸入品の重もなるものは綿糸にして之に亞くを外國綿布類とす、就中金巾の如き頗る有望にして現今は中等社會以上の使用に止まり、普通人民は地織の綿布を着するの狀態なれども、追々一般に普及するに至らば其輸入は一層增進すべし、又本邦に取りて最も適切なるは海產物の輸入にして、儀式的食卓には必ず本邦海產の二三種を見ざる

なく、貧民に至りては食鹽の貴きため昆布等を食用して其不足を補ふことあり、輸出重要品に至りては阿片を第一とし、既に雲南阿片を壓倒し、進んで外國產の領域を侵略せり、之に亞ぐは白蠟にして、次ぎは麝香大黃其他の藥劑とす、其他繭、屑物等あり

本港の物產　は土地の商業地に屬するより四方の貨物常に輻輳すれども製造物に至りては著しきものなく僅に二箇所の燐寸製造所あるのみ、其他主なる產物を擧ぐれば縮緬、絹紬、レース、麻織物、地織綿布、毛布類、酒杯、銃瓶、錠、鍵、烟管、腕輪耳輪、簪、銅器、青銅器、錫器、農具、漆器、毛皮是なり

本港の人口　は城の內外を合せて十一萬千九百三十九人にして、戶數は二万六千六百五十一あり

金融　は票號及び錢舖に依りて行はる、票號は我銀行と同じく而して其數凡て十三軒あり、資本の大なるものは二百萬兩、小なるも三四十萬兩を下らず、恰同慶、天成享、日昇昌、百川通の如きは其大なるものなり、錢舖は我兩換屋に同じく、銀塊を以て銅錢に交換し、若くは銅錢を以て銀塊に交換するの用を辨じ其數甚だ多し、細民は銀行の便に依ること能はざるを以て重に當舖即ち質屋を以て融通機關とせり

會館　重慶には八箇の會館あり、湖廣、江西、江南、浙南、廣東、福建、山西、陝西等八省人の集會所にして、固と商業上他地方に在住する同鄉者の集合機關となり其地方人及び地方官吏の抑壓を防衛するの目的を以て起りたるものなるが、漸次其性質を變じて現今殊に本港に在りては、各會館の館長は八省首事と稱して、地方官の顧問に備り、地方稅の賦課、兵備、消防の組織、諸救助金の徵收整理、養育院の管理及び破產の精算等、諸般の公務に服し、地方行政上頗る權力あり

宜昌

宜昌は湖北省宜昌府東湖縣に屬し、沙市の上流八十三哩、重慶に至る約そ四百哩即ち宜昌府城の在る所にして人口三十餘萬を有し長江の北岸に枕し巴蜀に入るの門戶たり、其位置は北緯三十度四十四分、東經百十一度十八分に在り

此地は固と楚國の地にして秦漢には南郡に属し、三國魏には臨江郡となり、唐宋には峽州と稱し、清に至り改めて宜昌府と爲す、府城の西北四里に石鼻山あり、直立五百餘仞、長江を俯瞰して聳ふ、黄牛山、明月峽、西陵峽、方山及び楚壘山あり、長江に沿ふて四川省に入るの關門にして、萬仞の石壁眞個に天與の大關たり

長江往復の滊船は此港を以て限りとするに由り四川出入の貨物は此地に於て轉載せらるゝもの多し、本港を開きたる主要の目的は之が爲めにして、今日の繁盛を見る所以も亦此に存す、物産は棉花、油、生絲等に過ぎず

此地より重慶に至る水路は、溯航するに三四十日を要し、下航するに十日乃至十五六日を要す、貨物賃錢は上水毎斤千六七百文、大水の候は千八九百文、下水六七百文、鴉片は毎箱千文内外とす、陸上費は一箇舁賃三十文、擔夫碼頭より南門外に至る二十四文の例なり、倉庫は招商局、太古、怡和の三滊船會社皆之を備へ、倉敷料は其會社の汽船に積むもの七日間は無料にして以後七日毎に一箇に付き大なるもの銀五分、小なるもの三分前後なりとす、然れども此地は直に轉送するもの多く倉敷料を要すること稀にして、各問屋も亦倉庫を有し、賣買を委托すれば手數料を徴するのみにて、別に倉敷料を請求することなし、問屋は雜貨行(海産をも含む)四家にして、信泰、信茂吉順、恒玉とす、西門外に在り、棉花行四、綿糸行二にして、共に南門外に在り、此外問屋業あらじ、而して其の手數料は五分を普通とす

商業慣習　雜貨及び棉花、綿糸に在りては貨物引渡後四十日目を以て代金の三四割を交付し六十日目に其殘額を交付す、其他海産洋貨は四十五日拂、金巾類は一箇月拂を例とす、通用の秤は海産は司馬秤、雜貨は廣五秤を用ふ、廣五秤の百斤は司馬秤に比し大なること五斤、而して雜貨加一と稱し百十斤を以て百斤に算するなり、又藥材店の用ふる秤は數種ありて其大なるものは一斤司馬秤の一斤半に當れり

金融　両替店の大なるもの四家あり、恒茂祥、蔚昌昇、吉誠升、和興玉とす、尙之より下る者二十軒内外あり、此地の支拂は一時通過の客商を除き、總て沙市、漢口等の銀行手形を用ひ(此地に銀行と稱すべきものなし)半ヶ月拂の期限とすれども百両に付き半ヶ月二三両の利子を辨ずれば此等両替店にて直に現金に換ふることを得、爲替

手數料は毎百両重慶は三両、沙市及び漢口は一両餘にして昂低を免れず

沙市

沙市は一名砂頭又荆沙と稱す、湖北省荆州府江陵縣に屬し、長江の北岸に位する一碼頭にして、漢口を溯る二百八拾七哩、宜昌の下流八拾三哩に在り、荆州府管い諸縣其外を繞り、長江を隔て〻湖南を擁し、背後に荆門州隕陽府の諸縣を負ひ、古來江表の重鎮にして、貿易繁盛の通衢たり氣候は夏季九十六七度に上り、冬季は降りて卅四五度に至るも、夏日は時々雷雨の到るあり、冬間は積雪五六寸に至るも、上海地方に比すれば、寒暑共に凌ぎ易しと云ふ、風向は春冬は西北多く夏秋は東南多し、是を江岸一帯の定向とす、民性勁直風俗野樸にして自ら慓悍の風を帶び、江浙地方の偷薄奸黠なるに比すれば、其氣骨の剛直寧ろ賞すべきものあり、

地勢は平衍にして低濕、到る處沮洳を見る、江岸に大堤を築き以て江水の氾溢を防ぐ之を金堤と名く上、當陽縣の董市地方より下、沔陽州の白螺磯に至るまで蜿蜒江に沿ふて七百餘清里、江水の增減は約七米突あり、堤上一長街あり堤街と云ふ、其他の市屋は盡く堤下に排列す、

市街は東南我一里半許、南北は狹窄にして廣さも六七町に出でず、戸數一萬二三千、人口八萬内外を有し、街頭頗る熱鬧を極め、銀行雜貨店の巨大なるものあり、舶來小間物殊に多し

縣衙は府城内に在り、此地は通判巡檢之を竝治す、其他厘金総局ありて厘金を改め、工部中關ありて船税を徴し、川鹽局ありて塩税を收む

府城は荆州府西北十五清里を隔つ、江陵、公安、石首、監利、松滋、松江及宜都の七縣を管し、人口約三萬、春秋楚の郢都にして現時の城垣は蜀漢の關羽の築く所に係り周圍三十餘清里最も軍務の要衝に當る、清朝に至り南京、成都と共に滿州將軍を置きて之を鎮し、荆州、宜昌、施南の三府を管掌する兵備道亦此に駐せり、然れども商業は沙市の占有に歸し甚だ繁盛の狀あるを見ず

沙市の商業區域は主として湖北湖南及び四川の三省に在り、而して貨物の運路湖北漢

水一帶の地は皆漢口に由り、宜昌附近は同地を經、其中間の諸州縣は沙市を經由するを例とし、湖南は下流地方に出づるものは、洞庭湖より荆河口に出で漢口に送り、其下流より仰ぐもの亦此線路に由るも、其四川より輸入する夥多の貨物は、宜昌に於て湖南船に轉載するものなきにあらざるも、直に此地に下り、此處にて轉運分配するもの多し、要するに沙市は水路縱横交錯し、太平河を以て洞庭湖に通じて湖南に達し、堤内の便河を以てするも漢口に達すべく、四川の柏木船、湖北の鴉稍、滿淵船、湖南の砂窩、吊釣、刀口、到扒等の諸船は常に數百千、帆檣林立せり、

然れども沙市の最も繁盛を極めたるは我嘉永の初年にして長髪賊の勢、最も猖獗を極めたるの時に在り、當時此地より九百四十清里を距りたる漢口は賊のために焚掠せられ四川來往の船隻は皆其危險を慮りて之より下流に下ることを避けたるを以て沙市に於ける貨物の聚散は頗る多大にして商賈の來集するもの亦頓に增加し、遂に空前の繁昌を見るに至れり、咸豐十年(萬延元年)英佛聯合軍の燕京を陷れたる後、漢口開港の約成り、同治元年貿易を開始して漢口は頓に般阜の境となると同時に、宜昌も亦

通商港と爲りしかば、其の中間に介在する沙市は唯瀘船の乘客を上下するのみにて貨物の積卸をなさゝるより、一時其の熱鬧を減少したれども、宜昌に比すれば地勢の便遙に其右に出づるを以て、更らに開港互市場となるに及びて再び面目を新にしたり

此地に於ける長江の流域は廣さ六町許なるも岸邊は水淺くして直に瀘船を碼頭に泊する能はず宜昌と同じく之を中流に停め艀を以て貨物乘客を上下せり、漢口より此地に到る約四十時間、下降には二十五六時間なるも漢口以上は夜間の危險を慮りて瀘船も夜間は航行せず、民船は漢口より溯航するに十五六日、下水に六七日を要す、又宜昌への來往は瀘船の航走は上水に十三時間、下水九時間を費し民船に至りては上水四五日下水二三日にして達すべし

物産は棉花、荊布、生絲、河溶絹、漆及漆器、水烟管、油、穀物、藥材、石灰等にして本邦より輸入すべきものは寒天、椎茸、摺附木、石鹼、洋傘、硝子器、時計、銅、硫酸、綿絲、綿布等なりとす

此邊は一帶に形勝に富み荊州府城龍山門の西北には擲甲山あり、漢の關羽が甲を棄て

たりと云ふを以て名あり、石首縣の西南に在る繡林山は昭烈帝の孫夫人を娶りたるの地にして楓葉十月滿山錦繡の如く、枝江縣の着紫山は昭烈帝の初めに蜀に入りし時、馬に秣ひ衣を更めたるの處と稱せられる此邊は山水の極めて秀麗なるのみならず、古來英傑の雄圖を逞ふしたるの處にして殊に漢末の三國鬼據に際して此附近一帶は中原として相驅逐したるの所、史に稱す劉備の諸葛亮を見て策を問ふや、亮曰く曹操、百萬の衆を擁し天子を挾みて諸侯に令す、此れ誠に與に鋒を爭ふべからず、孫權は江東を據有す、國險にして民附く與に援と爲すべし而して圖るべからず、荆州は武を用ふるの國なり、益州は險塞、沃野千里、天府の土なり、若し荆益を跨有して其の巖阻を保ち天下變あらば荆州の軍は宛洛に向ひ、益州の衆は秦川に出づれば孰れか簞食壺漿して以て將軍を迎へざらんやと爾來劉備は荆州を徇へ之を根據として益州（今の四川）を畧し以て三分の策を成せり、荆州に蜀漢の遺跡多きは之が爲めなり

漢口

漢口は北緯三十度三十二分、東經百十四度十九分に位し、清國の中腹に在りて湖北省漢陽府に隸し漢水の楊子江に會流する叉頭にあり、長江を隔てゝは武昌城と對し、漢水を隔てゝは漢陽府と相望み、宛然鼎足の狀を爲せり、西曆千八百六十一年三月、英清條約を以て貿易場となり、人口大約八十萬、戸數大約十萬あり、

此地は古來商業の中心地なるを以て河南省の朱仙、江西省の景德、廣東省の佛山と並び稱して天下の四大鎭たり、就中漢口は十一省の通衢にして支那內地貿易の要衝なるを以て全國三十の互市場中、上海の次に在りて廣東と相上下し長江沿岸に於ては繁華其右に出づるものなし

其の地勢は山高く江深く、水利の便極めて佳なり、長江を溯れば遠く四川、雲南、貴州に至るべく、流れに從へば安徽、江蘇の兩省は帆影に入り、漢水を溯れば河南、陝西、甘肅に達すべく、湖南、江西、廣西の諸省皆舟行の便あり、加ふるに四

川、雲、貴の貨物を裝載して長江を下るの船隻は此地を限りとし、更に下流に赴くことなきが故に該地方に回漕すべき貨物も亦下流各港より運致し來りて歸船の便を待てり、特に製茶の輸出に就きては本港より倫敦オデッサ等に直航の滊船ありて、他港より湊集するもの少からず、繁昌を極むる所以偶然にあらざるなり

本港より長江を溯ること三百六十哩にして宜昌港に達すべし、又上海より本港迄は五百九十六哩四五日にして達すべし、蕪湖、九江等の諸港を經て大船巨船の航通するもの多し、他日若し芦漢鐵道成るに至らば、交通の利便更らに增加し、東邦第一の市場となること期して待つべし、されば東西の識者皆此地を相して、他日東亞の大陸に於て、彼のベルリン、チカゴの地位を占むるものは、必ず漢口なるべしとて深く望を此地に屬する所以なり

本港輸入品の重もなるものは鴉片、金巾、海產物、毛織物、絹織物、藥種、砂糖、棉花等にして、輸出品は藥材、茶、白蠟、油、烟草、漆、生糸、鴉片、皮類等あり

若夫れ一葦の棹すに任せて附近の風光を看取せんか、漢水を隔てたる對岸の漢陽より漢水の上流なる安陸、襄陽等を訪ふべし、襄陽には諸葛孔明の邸址あり、玄德の三顧したる草廬を吊ふて往時を追懷すべし、三顧門は今猶依然たり、河陽の北隅を流る水に滄浪あり、屈原の當年滄浪の水清まば以て吾纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば以て吾脚を濯ふべしと歌ひし昔しも忍ぶべし、更らに去りて大江を渡れば武昌府あり、府城の西南に黃鶴樓あり、昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠々と云へるもの是なり、吳の孫權の築きし夏口城亦此に在り、赤壁山は北岸に在りて赤壁と相對し、槊を横へて月明を歌ひし處、歷々指顧の間にあり

九江

九江も楊子江の南岸に臨める河港にして、上海より四百五十哩の上流、漢口より百三十七哩の下流にあり、江西省德化縣に隸し、北緯二十九度四十四分、東經百十六度八分に位す、西曆千八百五十九年英清條約に由りて開港場となる、人口約五萬三千あり、

本港は綠茶の產出地方と交通の便利を有するを以て其輸出品の重もなるものは茶葉にして有名なる景德鎭の陶器も亦此地より輸出するもの多し

九江府の南、三里半にして廬山あり、山南を南康とし山北を九江とす、其の東南に五老峯あり、峯下に朱子の白鹿書院及び周子の濂溪書院の遺跡あり、香鑪峯は雙劍峯と相對し、東林、西林の二寺は巨刹相望み、太平興國宮は山中の古觀にして、江を行くもの遙に廬山を望めば景趣自ら佳なり、城北に潯陽江あり、潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟と歌ふて其の青衫を濕ふしたる江州司馬の感懷は一篇の琵琶行として其名依りて以て高し、潯陽江の下流六里餘にして鄱陽湖に合す、湖上の大孤山は四面の洪波中に屹然として獨り聳立せり、又府の西南十三里にして柴桑栗里あり、陶淵明の邸址たるの故を以て著はる

蕪湖

蕪湖も亦長江に臨める河港にして、鎭江と九江との中間にあり、北緯三十一度二十分東經百十八度廿一分に位す、千八百七十六年の英清芝罘條約に由りて貿易市場となれり

此地は長江の樞要に在りて內地水運の便利特に宜しく、且つ寧國府に通ずる大運河あり、河船交通の咽喉にして將來益々繁榮に赴くべき風あり、人口大約六萬、市街清潔にして道路廣濶なり、重要輸出品は棉花、麻、牛皮、紙、米、茶等なりとす

天門山あり、之より大信河出づ、天門中斷楚江開、水盡南天不見雲と云へる名所は即ち是なり

鎭江

鎭江は北緯三十二度十二分、東經百十九度二十七分に位し上海を距ること二百三十哩楊子江の南岸に沿ひ大運河の會流する處にあり、千八百五十八年天津條約に由りて開港場となりしが由來此地は江寧(南京又は金陵)に入るの門戶にして南淸地方貢米の北京に輸送するもの皆此地を經過して運河に入るを以て貢米船の輻湊するもの特に多し、地勢は

山岳多く江水渾濁なりと雖も水利縱横所謂四通八達の要地たり、一般の人情輕薄にして偷安貧利、義を知らず

輸出品の重なるものは米、小麥、金針菜、絹織物等にして輸入品は阿片、金巾、毛布類、金屬、雜貨等なり、貿易の趨勢は年々增進するの模樣あり

上海

上海は北緯三十一度十五分、東經百廿一度二十九分に位し、蘇州江の黃浦江に會流する所に在り、我長崎より航程四百五十哩にして楊子江口に至れば右に崇明の三角州を望みて江口を溯ること四十八里、吳淞に達し左折して吳淞江に入り、更に溯ること約十三里、地勢平坦にして茫漠涯りなく四顧一望、山岳丘陵の目に入るものなく、唯濁流の縱横に漫々たるのみ、人口約八十萬、百貨偏く輻湊し、規模宏壯にして肆店櫛比し帆檣林立し、眞に東洋貿易の中心市場たるの觀あり

土人の口碑によれば此地方は天津地方と同じく、曾て海中の一砂洲に過ぎざりしが十世紀の頃より漸く商業上樞要の地となり、其後一世紀半を經過し、上海の市街及び其の近傍は次第に人口蕃殖し商業旺盛に赴き、千三百六十六年に至り全く一の縣地となり、更に四五十年を經過する間に著しき進歩を爲せり

上海は其の地位の上より支那帝國の北部、南部及び中央諸省商業の中心となり、又富裕なる湖南の海港にして、且つ楊子江並に東方亞細亞との通商上に必要なる市場たり之れ其の地勢の獨り然らしむるのみならず、其の四郊の地に於て紀元前三世紀の頃、彼の棉花の輸入ありてより以來、棉花を以て著はれ、並に松江に於ける棉織物の製造多く品質も佳良にして之を支那全國及び外國に供給せるによりて、風光山色の目を喜ばすものなしと雖も、眼界一白棉花の滿開に際するか、若くは童幼婦女の隊が五々三々棉花を摘むの有樣に接せば、陶然として仙界に入るの想あらしむ

千三百六十一年より第十六世紀の中頃に至るまで上海は常に我國人の侵犯する所となれり、當時我國人の支那沿岸に寇するや、獨り上海地方のみならず、屢々江西及び浙江の諸地方にも及び、千五百四十三年の頃は益々猖獗を逞ふせしを以て千五百五十

二年上海市場は繞らすに墻壁を以てしとが防禦に備へたれども千五百六十年重ねて其の侵掠を被りしと云ふ、支那人の說に據れば我國人の入寇にして上海及び其の附近の村落を掠奪せしより上海市街の風俗は豪放粗野となり、一般に敗德の所業行はれしが其の以前に在りては民俗優雅にして文人雅客の淵藪と稱せられ、四方の名士此地に來集し、一時文物粲然、其名全國に現はれたりと云ふ

上海の開港は千八百三十二年英國軍艦「アムヘルスト」號の入港に起れり、當時英國東印度會社の貨物監査役ハミルトン、リンドセイ氏は書を以て英清通商の事を請求せしも支那官吏の容るゝ所とならず、僅に道臺の許可を得て數百弗の絹布類を買入れたり此買入れは上海に於ける外國取引の濫觴たり

其後數年支那官吏は曾に通商を許すの模樣なきのみならず、却て外人を虐待するの擧動ありしかば、英國は遂に支那遠征軍を發したり、千八百四十二年五月、英國艦隊は四千の陸兵を載せて廣東省に着し、先づ厦門の砲臺を略取し、下浦の壘砦を破壞し定海地方を占領し、舟山を陷れ、進んで鎭海、寧波及び乍浦を攻め、勢に乘じて吳淞に進み、六月八日アムヘルスト島に投錨し、同十三日艦隊の過半及び十二艘の運送船は容易に河口に進入せり、此の時に當りて上海及び吳淞の防禦は、支那軍に取ては頗る强大にして、其の備ふる大砲は總て四百六門あり、吳淞河に浮べたる支那形兵船も其數頗る多く、以爲く英兵能く來ること能はざらんと、然るに開戰後二時間の後は砲臺は沈默し、英軍は盡く上陸して吳淞上海を占領し、市民を撫して悅服せしめ更らに進んで鎭江を略取せり、此報北京に達して朝廷色を失ひ、委員を派して假條約を定めたり、之を南京條約と云ふ、其後皇帝の批准を經て、上海、寧波、福州、厦門汕頭の五港を開きたり

開港後支那政府の爲にも上海の爲めに最も悲慘の歷史を止めたるは長髮賊の蜂起なりとす、千八百五十二年大平王と稱せる洪秀全の一黨は、頻りに楊子江岸に沿ひたる大都市を侵掠し、進んで產茶及び絲糸地方に近かんとせり、而して之と相應せる賊黨の廣東地方を脅かし、厦門を略取するあり、人心恟々として上海に於ける商業取引は中止の姿となり、南京、鎭江の二城既に陷り、賊勢破竹の如く益々猖獗なり、此の時に

當りて支那政府は力、殆んど此賊を鎮定すること能はず、上海居留地は余儀なく防禦の爲めに義勇兵を編成するに至れり、然るに上海の城市は翌千八百五十三年九月七日を以て賊黨の爲めに略取せられ、義勇兵の多少は殺され、知縣は戰死し、稅關は掠奪せられ、爾來十七個月間上海は占領せられたり

此の間にありて無紀律なる支那の官兵は、賊黨に對して妨害を加へずして、或は無辜の市街を燒燬し、或は外人の居宅に闖入して、財物を掠奪したるを以て、遂に義勇兵官兵、賊黨と三者の相混戰するに至れり、千八百五十四年四月四日、上海の義勇兵は水兵と連合して支那兵の牙營を襲擊して之を燒燬し、互に暴を以て暴に代ふるの狀態にし其の慘狀言ふべからざるものあり

既にして賊黨一時逃去りしが千八百六十年長髮賊(太平賊)更らに進入し來りて上海の市城を侵略し、及び浙江、蘇州等の富裕なる市城を略取せしかば、上海居留地は之等避難民の隱遁場となり、上海の市街を劃絕せる小江は支那船を以て喧咽し、其船中にも陸上にも殆んど立錐の餘地なかりき

當時居留地に於ては蘇州の略取せられたるを聞き、直に防禦に着手し義勇兵を以て防禦線を嚴守せしめ、人心恟々たれども遂に前日の如く暴威を逞ふするに至らざりしが寧波陷り、杭州守りを失ひ、芝罘の略せらるゝに及んで外人皆色を失ひ、千八百六十二年に至りて此賊忽然として吳淞に出現し、居留民は一層畏懼の念を生じ、驚愕措く所を知らざりしが、既にして八萬の長髮賊蘇州より進み來らんとするの報あり、吳淞上海の二市は忽ち又賊の侵略する所となり、烟焰空に漲れり

時に降雪四十八時間に渉り、其堆積三四尺に及び　賊軍之が爲めに躊躇の色あり、居留外人は此機に乘じて防禦に務め、木柵、土壘を築造し、或は大砲を据付け、溝を深ふして堅く之を守り、積雪の消滅するに及んで屢々賊軍を擊退し、一方には官兵の將李鴻章、節制の嚴明なるあり、一方には英佛同盟の水兵あり、義勇兵の將軍ゴルトンあり、互に着々功績を著はし、一千八百六十三年才登將軍の常勝軍に將となりてより忽ちにして蘇州を回復し、千八百六十四年悉く此賊を討平するに至れり、此間十餘年上海の進步發達を妨げ、非常に慘況を印せりと雖も、亂平ぎて後、上海は殆んど其の

面目を一新したり

○上海の貿易　は外國人居留地に於て行はれ、城内の商賈は唯若干の雜貨を小賣するに過ぎずと雖も、支那特有の物産を購入せんと欲せば城内を以て便且つ廉なりとす畢竟居留地は宛然歐米都府の觀をなし縣城内は純然たる支那市街たるの相違あり

○縣城　は申江の西岸に在り、繞らすに城壁を以てし、周回二里、城門七所にあり大東、小東、大南、小南は西門、老北、新北と云ふ、就中大東、小東、新北の三門内は城内の大街にして頗る繁昌の區とす、大東門内に道臺衙門あり、小東門内に知縣衙門あり

○居留地の重もなるものは英、佛、米の三區にして、數條の大路東西に通じ、小路南北に横はり、市街整然として家屋の構造も頗る壯麗を極む、之を歐米の大都會に比するも、其の三等都府に下らずと云ふ

○道路　の最も著名にして車馬出游の便なるものは、蘇州江邊に沿ふて約七里の「ジエッス、フイールド」路と稱するもの、英佛両租界より出でて各五里半、徐家滙路と稱するもの、黄浦に沿ふて米租界より開ける約六里の楊子浦路と稱するもの是なり

○氣候　は概して良好と稱せらる、寒暖計の最低は華氏二十五度より最高百四五度に上昇することあれども近き八箇年の統計に據れば、平均春は五十度、夏は七十八度秋は六十二度、冬は三十九度なりとす、冬季十一十二の両月は乾燥にして晴天多し、夫れより北東の風起りて寒氣襲來するを常とす、又夏期は炎熱殆んど堪へがたきことあれども概ね數日に過ぎず

○公園地　は千八百七十七年の建設にして、黄浦、吳淞両江水の會流點に建設したるものにして風景極めて美なり、此園は北京の圓明園に象りしを以て亦圓明園とも稱せり、蘇州江畔に又一の公園あり、重に支那人の遊覽に供せり

○上海の今昔　上海に居留地を創定するの際は、沼澤沮洳、蘆葦莽々たりしが、今や高屋甍を列ね、層樓雲に聳え、車馬絡繹、行人織るが如く、電線、電話、瓦斯燈水道等の設備至らざるなく、文明の利器は地の上下に縱横たり、又建築の觀るべきものは領事館銀行は勿論、英租界の「トリニチー」寺院、佛租界の天主堂、及び英米両教會

に属する家屋なりとす、郊外の徐家滙に羅馬教の汎堂あり、有名なる天文臺及び學校養兒院、動物園等は皆此教會に附屬するものにして、全支那沿河の氣象測知の秩序は全く此天文臺にあり、其他屈指の建築は英租界の上海倶樂部、規矩堂、地方公會館、日耳曼倶樂部、上海圖書館、博物館、學校等にして近く數十年の間孰れか其の變遷に驚かざるものあらんや

○名蹟　は城内の城隍廟、武聖宮、法華、牡丹、青蓮院、一粟院及び郊外の靜安寺、龍華塔等にして、城内の西南隅に孔子の文廟あり、米租界の虹口に天后宮あり、這個支那人の尤も尊敬禮拜すり所

○水道局　は自來水局と稱し千八百八十年創立の事に決し、資本を倫敦に募集し、英人ハート氏の設計にて其翌八十一年八月工事に着手し八十三年七月に至りて竣功せり、其水は先づ河中より沈澱池に導き、濁水の汚物泥沙を沈澱せしめ、更らに之を用水池に導き、夫れより沙水盤に移し此所にて充分に濾過して清澄ならしめ以て清水倉に注入し清水倉より之を送水井中に送れば一對の送水器械ありて氣力に依りて之を汲上げ、池中の大管を通じて高架せる貯水樓上に推送するなり、其量は毎時我二千五百石なりと云ふ、此樓は地平より百二十九尺の高度にありて常に我三千七百五十石の水を貯溜するを以て之より大小管を通じて租界全部及び湧泉路外に分給す、居留地に埋伏せる大小管の延長は現今五十哩以上なるべし、此會社は資本十二萬磅にして石炭の消費一年一千餘噸なりと云ふ

○造船所　は四個所あり、一は縣城より少しく河上なる高昌廟にありて官有に屬す一は縣城の對岸蕪家塘にあり、一は虹口にあり老船廠と稱し、一は浦東にありて所船廠と云ふ

○氣船會社　の重もなるものは招商局、怡和洋行、太古洋行にして、定期航路を此地に有する外國氣船會社は、我日本郵船會社を始め、加奈太氣船會社、佛國郵船會社及び獨米魯等の氣船會社なりとす、我郵船會社は横濱、神戸、馬關、長崎を經て毎週一回此地に定航せり、其の乘客賃は長崎より一等片道二十四圓往復三十六圓、二等片道十五圓往復二十二圓、三等は片道六圓なりとす

○郵便局　は日英米佛獨各々自國の郵便局あり、我郵便局は我領事館内にあり、通常郵便は固より爲替貯金の取扱をもなせり

○電信　は大北大東両會社の外清國電報局あり共に一館内に在り

○旅館　は虹口天橋の傍らに「アストルハウス」及び英租界に「セントラル、ホテル」、佛租界に「佛蘭西ホテル」在り、我邦人の旅館は、東和洋行、常盤舍、矢野旅館等にして皆虹口に在り

○新聞　は北清日報、「マルキユリー」、「北清ヘラルド」、「スエレスチアル」、「エムハイアー」、「テンペラレス、ユニヨン」の外國新聞の外、支那新聞に申報及び字林滬報の二種あり、其他外國教會等より發兌する雜誌數種あり

○通貨　は馬蹄銀及び外國銀行の發行に係る紙幣を用ふ、而して小取引及び小賣買には墨其西哥弗、銅錢、小銀貨を用ふ

蘇州

蘇州府は江蘇省の首府にして上海を距ること西北我二十八里二十四町なり、上海より蘇州江に依りて崑山を通過し、蘇州府に至る水路凡そ我三十七八里にして、此間の航行に要する日數は、漕船にて一夜即ち十三時間、支那船にて二日即ち四十八時間を費す

此地は周の泰伯中雍の始めて居りし所にして武王、仲雍の曾孫、周章を封じて吳國と稱す、闔廬より以後、此處は都となれり、戰國の時、吳亡びて越に屬し後ち楚に隸し秦には會稽と曰ひ、東漢、三國、晉、宋、齊、梁には皆吳郡と稱せられ、隋は吳州と云ひ、唐は蘇州と云ひ、宋、元は之を平江と稱し、明、清は蘇州府を爲す

蘇州府城は即ち吳王の都せし所にして、吳淞江の東岸に在りて太湖に枕し、周圍約我五里あり、其形南北に長く東西に短しと雖も稍々方形にして、東に彼の伍子胥の目を抉りて懸けたる胥門及び閶門あり、西に婁門及び閶門、北に齊門、南に盤門、都て六

門を有す、市街は城の内外に跨り、城内の西南閶門内附近を以て繁榮第一とし、胥門内附近之に亞く、各地より來れる商船は多く閶門外に碇泊し、官船は多く胥門外に繫泊せり、是れ蓋し閶門内附近は蘇州府中商業上の重要地にして、胥門内附近は政治上の重要地なるが爲めなりと云ふ、

市街の道路は敷くに石又は瓦を以てし、幅の廣さも二間、狹きは一間半を出でず、其兩側は大賈巨商軒を列ね、盛に商業を營むを以て往來の雜踏、眞に肩摩轂擊の狀あり且つ商店の宏大なると商品の饒多なるとは以て此地の殷富を証するに餘あり、今其の盛況の一班を例せば、其の道幅は我東京日本橋人形町通若くは神田淡路町通りに比すれば、一層狹隘なるも、其の繁華は却りて之れに勝れり、英人の此府を形容するに「支那の巴里」なる語を以てせるもの蓋し偶然にあらざるなり

其人口及戶數に至りては信用すべき統計なきを以て精密に知ること能はずと雖も、府城の廣大なると人家の稠密なるとの點より考察するときは戶數約六萬、人口約五十萬と云ふは實際に大差なかるべしと信ず、氣候は上海と格別の相違あるを見ず

風俗は、一般に華美を好み、輕佻にして珍異を喜び新奇を競ひ、舶來の貨物を尙ぶの風あり、此風は江蘇全省及び北部浙江省に通じて大抵皆然らざるなしと雖も、殊に蘇州府に於て其甚しきを見る、市中に雜貨店の多きと舶來品及び其模造品の多きを以て見るも、其一班を窺ふに餘りあり、

人情は古へより文藝を尊崇し、碩儒の輩出したること少からず、現今に至るも身を讀書に委る者頗る多く、咿唔の聲、閭里に絕へずして、昔日の齊魯之を江浙の地に見るの感あり、故に人氣も自ら柔和にして剛毅の風に乏しと雖も、品位優良、風采高雅なるの點に至りては清國内他に見ざる所なりとす、此國の諺に云へり「蘇州に生れ廣東に住み遼州に終れ」と、蓋し蘇州は最も品采ある人物を出し、廣東は最も豪奢なる生活を爲し、遼州は棺槨の最良なるを以て有名なればなり

美人も亦蘇州最も名あり、北新地方に於て蘇妓一たび至ると云へば五陵の年少ならざるも、一曲の紅綃數を知らずと云ふ、蘇州の妓は又北京に至りて官話を學びたるものにあらざれば、風烟の間に立つて流行兒となることを得ずと云ふ

物産、は一般風俗の優美華奢なるに從ひ、自ら美麗のもの多く、蘇州産の名を以て世に珍重せらるゝものは、繭、生絲、織物、鐵器、木石、玉角等各種の細工物、即ち團扇、首飾、縫箔、密蠟等にして米又及び綿を産す、就中絹織物は其の品質色合等に於て他所の遠く及はざる所、蘇州府は遂に商業地と云はんよりは、寧ろ工業地と云ふの適當なるを覺ゆ、殊に一省の首府にして水路は縱横に相通じ、頗る漕運に便にして上海、鎮江、楊州、南京及び嘉興等の往復船舶殊に多し

銀行　の數は二十軒餘あり、孰れも數十萬乃至數百萬圓の資本を以て營業せり、通貨は銀両にして上海銀に比すれば秤量大なり、上海銀千両は蘇州銀の九百二十六両に當るの比例なれば假りに上海銀七十五両を我百圓とすれば、蘇州銀一両は我一圓四拾錢に當るなり

蘇州の風光　を歴史的に見れば興味少からず、白樂天の所謂「黄鸝巷口鶯欲レ語、烏鵲橋頭氷未レ消、綠浪東西南北水、紅欄三百九十橋」とは能く此の風光を寫したるものにして、木蘭の楫、沙棠の舟、美酒を載せて豪懐を玉簫金管に注ぎし當年の雅客は髣髴として見るべし、木蘭堂、齊雲樓は皆府城に在り、府城の西、一里にして楓橋在り、山に面し水に臨み、最も游息するに適す、南北往來の要衝にして、寒山寺を隔ること十六町、彼の張繼が夜此の楓橋に泊して「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」と歌ふて旅愁を慰めし所、去りて府城の西、六里にして

伍子胥の廟　あり、史記列傳に據れば伍子胥、名は員、楚の人なり、父を伍奢と曰ふ、世々楚王に事へ直諫を以て名あり、楚の平王、伍奢をして太子建の大傅たらしめ費無忌なるものを以て之が少傅たらしむ、而して無忌、太子に忠ならず、一日平王無忌をして太子の爲めに婦を秦に取らしむ、秦の女美なり、無忌馳歸りて平王に言つて曰く秦の女極めて美なり、王自ら取りて更らに太子の爲めに婦を娶るべし、平王喜びて自ら秦の女を納れて之を絶愛し子、軫を生む、更らに太子の爲めに婦を娶る、無忌既に平王に寵せられ太子を去りて平王に事へ後禍の及ぶを恐れて太子を平王に讒す王怒りて奢を召して之を詰る、奢曰く王奈何ぞ讒賊小臣の言を以て骨肉の親を疏ずる

やと、王益々怒り伍奢を囚へ人をして太子を殺さしむ、太子建亡て宋に奔る、員（伍子胥）往きて之に從ふ、尋で太子と俱に又鄭に奔り、太子殺さる、乃ち太子の子、勝を擁して員は危急を脱して吳に向ひ、未だ達せずして病に罹り、中道に止りて食を乞ひ、行く〳〵吳に至りて勝と共に野に耕すこと五年、吳王闔廬の知る所となり、之に事へて建策少からず、一たび楚を伐つて舒を拔き、二たび伐つて潛を取り、越を敗り三たび楚と戰つて大に楚軍を豫章に破り、楚の居巢を取り、四たび楚と戰つて其の首府郢を衝く、楚の昭王出奔す、員即ち平王の墓を堀りて其尸を出して鞭つこと三百、是の時に當りて、孫武と共に獨り西の方、疆楚を破るのみならず、北、齊晉を威し、南、越人を服したり、越王勾踐、膽を嘗め薪に臥して國力を充實し、吳を姑蘇に破りて吳王闔廬を傷く、闔廬創を病み將に死せんとす、太子夫差に謂つて曰く、勾踐の爾が父を殺せるを忘るゝなかれと、闔廬死して夫差の立つに及びて戰射を習ふこと、二年、越を夫湫に敗りしが、越王勾踐兵五千を以て會稽の上に棲み、降を請ふ、吳王之を許さんとす、伍子胥諫めて曰く越王人と爲りて能く辛苦に堪ふ、今、之を滅さざれ

ば後必ず悔あらんこと、夫差聽かずして越と和し、更らに師を興して齊を伐つに當りて伍子胥又諫めて曰く、勾踐は食するに味を重せず、死を吊し病を問ふ、用ふる所あらんと欲してなり、此人死せざれば必ず吳の患をなさん、今、吳の越あるは猶ほ人に腹心の疾あるが如し、而かも王、越を先きにせずして齊を務む、豈に謬らずやと、王又聽かず、齊を伐つて搥ち、益々子胥の謀を疎んず、其後吳王重ねて齊を伐たんとするに當りて子胥又之を諫むれども聽く所とならず、出で〳〵齊に使するに當りて其の子を齊に屬し、吳と俱に亡ぶるの益なきを語り、讒亦屢々吳王に入る、是に於て吳王、屬鏤の劍を子胥に賜ふて自殺を諷す、子胥天を仰いて嘆じて曰く、我れ汝の父闔廬をして霸たらしめ、諸公子の立を爭ふに當りて我死を以て之を先王に爭ひ以て汝を立てたり、汝立つに當りて吳國を分つて我に與へんとせしも我願て敢て望まざりき、然るに今、諛臣の言を聽き以て長者を殺す、汝夫れ久しからず、乃ち其の舍人に告げて曰く、吾が墓上に樹ゆるには必ず梓を以てせよ、吾が眼を抉りて吳の東門の上に懸けよ以て越冠の入りて吳を滅すを觀んと、蘇州府城の東門依りて以て落はる、

府城の西北一里半にして虎丘山あり、山中に劍池及び千人坐石あり、此寺は晉の王珣の故邸にして頗る勝地と稱せらる、

天平山　は府城の西にありて巍然特出す、附近の群峯兒孫の如し、

靈巖山　は府の西南にあり、吳王娃宮の故山にして太湖を瞰み、洞庭に至り、兩山翠を滴らせり、靈巖寺は梁の武帝の建築に係れり、姑蘇山は府西六里にあり姑蘇臺は其の上にあり、彼の闔廬が三年財を聚め、五年にして作りたるもの是なり、其他名勝擧げて記すべからず

寧波

寧波は北緯二十九度五十五分、東經百二十一度二十二分に位す、海を距ること約十三哩、甬江(鄞江)に臨みたる要地にして人口凡二十万と稱せらる、千八百四十二年江寧條約に依りて開港場となれり、碼頭は水深二尋許りに過ぎずして滿潮にあらざれば、巨船の出入に便ならず

此地は昔時より海外貿易を爲せし所にして宋、元の際既に蕃商往來し、明に至り我國人も亦此地にて貿易せり、歐洲と通商を開始してより、上海の隆盛に反して此港は萎靡不振の姿に沈滯せしと雖も、地勢の浙江省南部の要地を占ひると、河流縱横して舟楫の便なる爲め百貨輻湊し、人民も勤勉にして險を守り利を射るに巧なるを以て、古來此地は豪商多し、我國人は甚だ少なく、唯一二の雜貨店あるに過ぎず、輸出品の重もなるものは、茶、棉花、生糸、水產等なり

此地は古へ越の地にして秦の時會稽郡に屬し、隋の越州、唐の明州、宋、元の慶元にして明より寧波府と稱せらる、府城に鎭海樓、甬江樓の勝地及び天寧、境渦等の古刹あり、市街は華潔にして亭宅頗る閑雅なり、古へ我遣唐使及び支那船の我國に來往するは此地なりしが如し

四明山　は府の西南にあり、周回百二十餘里、紹興及び台州の境を壓し、二百八十峯と稱せらる、山巔に五峯ありて形、芙蓉の如し、山上に石窓四穴ありて甚だ奇なり

虎尊山は定海縣の東にあり、海口に屹立す、又蛟門山あり、二山の東を東海と稱し、

舟山、秀山、補陀落伽等の諸嶋、海上に星羅碁布せり

杭州

杭州府は浙江省の首府にして蘇州府を距ること四十二里三十町、上海より水路嘉善嘉興、桐郷、石門を經て來る、其間八十餘里、滊船一昼夜にして達す、支那荷船は四日間を要す、蘇州、杭州の日數も亦上海、杭州間に同じ

府城は東南錢塘江に枕し西、西湖に沿ひ、西南鳳凰山將臺山を負ひ、北は一帶曠野に連り、壁の長さ凡そ七里にして大門九個を有す、上海より來る船は悉く武林門外の新碼頭に碇泊するを常とす、市街は大抵城内に在り、上城、中城、下城の三に分ち、最も繁榮なる部分を上城とす、鳳山門内附近是なり、巨商大賈概ね此邊に集る、此等繁榮なる部分を除けば他は皆寂寞たる有樣にして、町端或は城外に至りては彼の長髪賊の焚掠に罹りたる儘にして、草滋り壁崩れ、今に於て尚ほ古戰場の觀あり、然れども概括して之を論ずれば、其の道路の狹隘なると繁華なる市街の雜踏せるとに至りては

敢て蘇州府と異ることなし、而して其の戸數は七万、人口は大約六十万にして氣候亦蘇州府と大差なきが如し

人情風俗も亦蘇州と大同小異にして、文學を尚び懦風を慕ふの風、寧ろ、蘇州の右に出づ、人氣も亦柔弱に流るゝと雖も、其中自ら一種の氣骨ありて存す、抑も浙江省の地たる錢塘江を以て中央の界線とし江北の諸府を浙西と稱し、江南の諸府を浙東と稱す、此東西兩浙の間には其人氣風俗に於て往々差違の點あり、即ち浙西は人氣風俗敢て江蘇省の諸府に異る所なしと雖も、浙東の人民は一般に福建省の人民に酷似し頗る朴卒の風を存し、稍々剛毅の氣風あり

此地は水運最も便利にして其の商業區域も亦廣大なり、全浙中温洲、寧波附近を除くの外は皆此地に屬し、且つ江西安徽の一部を占め西北は鎮江、蘇州に通じ、南は湖州に至り、又紹興、餘姚を隔て寧波に通じ、一方は運河に由りて蘇州に通じ、他方に於ては申江に由りて上海に達し、錢塘江を溯れば以て安徽に到るべく之を下れば以て外洋に出づべく頗る舟楫の便あり、殊に此地は運河の盡頭に當るを以て、船舶の繫泊

常に夥多なり、舊時は尚一層繁華の地なりしも滬船開通後は、寧波、温州に出るものあり、又た上海の非常に旺盛に赴きたる爲めにも稍々其の勢を減殺せられたるの觀あり

物産は繭、生糸、各種の絹織物、棉花、米穀、扇子、茶、烟草、釦、剪刀、錫箔等を以て最とす、就中絹織物は蘇州府と拮抗し、清國中他に匹敵するものなし、此他本港を經て輸出するものは浙江省内に於ては紹興の酒、當陽の石灰、蕭山の烟草、金華の蠟乾、嚴州の材木、於潜の白求、桃花紙等著名のもの少からず

此地は春秋には吳越、戰國には楚、秦には會稽、東漢には吳に屬し、陳に錢塘、隋に杭州と云ふ

吳山　は府城の東南に在り一に胥山と云ふ、吳人の子胥を祠る所にして香火絶へず山上に寺觀あり、左、錢塘江に臨み、右、西湖を瞰る、景色絶佳、東に鎮海樓あり、結構壯麗を極む、又有美堂あり

武林山　は西南に在り、山中に月桂峯あり、靈隱寺あり、又龍山あり、東坡表忠の碑あり、

鳳凰山　は錢塘江に俯して海門を望む、山勢鳳凰の飛ぶが如く、宋の紫禁城、慈寧宮及び唐の望海樓は皆此山下にあり、又勝果寺あり、梵天寺あり、其外、怪石の多き南屏山、湖上に獨立せる孤山、孤山の巔に四照閣、下に斷橋、前に湖心亭あり、淨慈寺の前に雷峯あり、西に天竺峯あり、天竺寺あり、又飛來峯あり、中天竺の靈鷲山の北嶺に酷似し、何の年か飛來せると云ひし僧懸理の語に由りて以て名けたりと、韓世忠が將印を解き驢に跨り酒を携へて遊びたりと云へる翠微亭は此峯上にあり、棲霞嶺に岳飛の廟あり、葛嶺に賈似道の蟋蟀堂あり、忠なりしは香火絶へず、佞なりしは遺跡、荊棘に委す、

西湖　は源を武林泉に發す、周回五里餘、湖上に十景あり、平湖の秋月、蘇隄の春曉、斷橋の殘雪、雷峯の落照、南屏の晚鐘、𤋮院の風荷、花港の觀魚、柳浪の聞鶯、三潭の印月、両峯の插雲是なり、湖を繞れる山川の秀麗なるは天下得難しと稱せられ文人雅客の題詠實に少からず

錢塘江　は府城の東を流る、源を歙縣の玉山に發し、富陽縣の富春江となり、浙江となりて海に入る、江口に三角洲ありて江中に横はり、能く海潮を拆して倒流す、故に浙と名く、海口は卽ち錢塘口にして古へ錢を聚めて塘を築き海濤に防ぎし事あり故に名くと云ふ、八月の觀潮には士女、城を傾けて群至す、之を弄潮と云ふ、我潮干狩なり、

天目山　は道家の福地にして臨安縣にあり、東に徑山あり之より天目に通ずと云ふ

温州

温州は北緯二十八度一分、東經百二十度三十八分に位し、甌江口の上流にありて浙江省嘉知縣に屬す、千八百七十七年芝罘條約に由りて開港場となる、海を去ること二十哩の河港にして江口より一帶斷山の東面にある樂沽縣の城垣を過ぎ砲臺の邊を溯ること七海里にして繫泊處あり此間の水深十八尺より四十二尺に至るも淺洲多きを以て船路を熟悉せざれど駛行し易からず、地勢、四方に高山多く、風景美にして市街も亦清潔なり人口約八万

輸出品の重なるものは茶、明礬、竹笋、甌柑、藥品、木材等なり、居留外人數名に過ぎず

此地は戰國の際は越に屬し、秦に閩中郡、漢唐には甌王國、晉の永嘉、唐に東甌、温州、宋には瑞安、元以後温州と云ふ、

福州

福州は千八百四十二年英清條約に由りて通商港となる北緯廿六度二分、東經百十九度二十分に位し、閩江にある河港にして、海を距ること約三十五哩の南岸にあり、其の南臺と云へる所に外國人居留地あり、南臺より閩江を下ること約九哩の馬尾港は外國船の碇泊所にして港内水深く山岳周り、港の中央に羅星塔島あり、岸上に船政工廠あり、一帶の地勢、峻嶺高峯、江岸に峙ち、蒼翠嵐霧變幻極りなく、樹木鬱蒼として風景佳なり

此地は秦の閩中にして晋の晋安、唐の建州、福州、長樂たり、臺灣島、我に歸してより最も我と密邇し、我が對岸の一要港として大に我邦人の留意する所、福建省城亦此に在り

省城　は閩江の北岸にありて市區豁達、家屋整然、能く溝渠を通じ、清潔にして水利四達し、人口大約六十万と稱す、人情は剛にして奇を好むの輩多く且つ賭博大に流行す

居留地には各國領事館、銀行滊船會社等あり、我國人も漸次其數を增しつゝあり、此地は古來外國と交通せる所にして殊に我長崎に往來すること久しく、今に至るも我が內地開港場に在留する清商中には特に福州人を多しとす

閩江は源を建陽の分水嶺に發し、東流すること百數十里、釣龍臺に至り、東南に流れて江東西峽と合して海に入る、又府の東南及び羅源、連江、長樂、福清等の諸縣は、皆瀕海地方にして、海堤を閩、長樂二縣の東方に築き、海中には小嶼碁散せり

本港の貿易重要品は紙、茶、木材の外、竹箏、竹器、烟草等を輸出品の重もなるものとし、阿片、金巾、金屬を以て輸入品の重もなるものとせり、我國より輸入する貿易品は海產物、燐寸、棉布、其他雜貨類とす

厦門

厦門は北緯二十四度二十八分、東經百十八度三分に位し鎭海角と回頭角との間に在る各島の最大なるものにして一名を鷺島又龍島と云ひ、漳州府同安縣に屬す、周回凡そ十一里、東面の全門鎭と圍頭澳とあり、西南に古浪嶼あり、以て厦門の內港を爲す千八百四十二年南京條約に由りて貿易場となれり、人口約三十万あり、市街は島の西南部に連り、家屋櫛比す、港內水深七八尋あり舟舶の繫泊に便なり、

外國人居留地は古浪嶼に在り、周回凡三哩、長さ一哩にして高閣層樓、蒼樹奇石と相點綴して甚だ絶景なり、

輸出品の重もなるものは茶、砂糖、紙、夏布、金箔の類にして、輸入品は米、阿片、木綿、雜貨、毛布、豆類とす

本港は福州と廣東との中間にありて臺灣と相對し、臺灣との交通最も繁く、香港、マニラ、シンガポール等と直接交通の便あり

鄭成功が未だ臺灣に據らざりし以前は兵を此處に連れて社稷の興復を圖り、灣の内外に旱散せる小嶼中明末の古戰場少からず

汕頭

汕頭は北緯二十三度二十分、東經百十六度四十分に位し、廣東省潮州府澄海縣に屬せり埠頭は韓江口より凡そ五海里の上流にあり、江流南より東に向つて屈曲し海潮の力に抗抵するを以て漸く廣濶にして巾凡そ半里の内港を爲す汕頭は即ち其の北岸に在り水面より高さこと僅の尺度に過ぎずと雖も南岸は險巖屏立す其中に突出して高岬を爲す所あり入港船舶の目標とする所にして巨船の停泊所は埠頭の前面にあり水深三十六尺より四十八尺に至る、此港は千八百五十八年天津條約に由りて貿易市場となる、香港を距ること百八十哩、福建省の界に接せり、潮州府城は此より三十五哩あり、此處は唐の所謂潮陽にして韓退之の貶せられたるの所

本港は赭岩四方に峙ち人家其間に綺置して頗る奇觀なり、人情勤儉利を見て難を避けざるの風あり、輸出品は砂糖、錫器、海産物を以て重要品とす、貿易は大抵新嘉坡其他各港に住居する支那人に因りて行はるゝを以て歐商甚だ少なく、只銀行運輸保險等の商會に過ぎず

廣東

廣東は支那の開港地中最も早く開けたる所にして、第十世紀の頃、アラビヤの航海者此地に往復して東西亞細亞の間に交易を通じ、千五百十九年、葡萄牙人來り、其後百年を經て和蘭人來り、千六百三十七年より英吉利人來りて此に交通を開始し、千八百四十二年英清條約を以て通商場となれり

此地は海を距ること八十二哩、粤江の上流にありて、北緯二十三度七分、東經百十三度十四分に位し、廣東省城の所在地にして東江、北江の二水合流し來りて、府内を貫

通ず一に之を珠江と名く、數千噸の巨舶を泛ぶるに足る、其の上流は内地に派別し及び西江に連絡し、遠く廣西の各地に渉り、運輸極めて便なるを以て商業頗る盛なり、人口百二十万、其の四分の一は舟筏に依りて水上に生活し、田園花竹鷄犬の類、皆水上に具備し、甚しきは終身陸地に上らざるものありと云ふ、

此處、岳陵に連り、江灣に臨み、景致甚だ佳なり、高さは越秀山、地を拔くこと二十丈、山上に越王臺趾あり、南に番山あり、北に禺山あり、府北に蓆帽山あり、府西に浮丘山あり、水に東江あり惠州の博羅縣より西流して來り、又滇、武の二水を合して來る北江あり、廣西の諸蠻地より遠く來りて末流二派に分れて海に注く西江あり、山水の勝、枚擧するに暇なし、又縣南十二里にして海中、崖山あり、延袤十數里、宋の幼帝禺入水の所と知らる

廣東は夙に外國人に接したるの土地なるを以て市民の外情に通ずるもの英語を解するもの極めて多く、隨て泰西物貨の輸入は本港に始まりて漸次各地に分布せらるゝもの〻如く、鴉片、金巾、毛布、其他支那に入りて需用の多き西洋諸雜貨の類は皆本港を本とす

氣候　は温暖にして霜雪稀に、夏季は八十度より百度にして冬季と雖も四十度を下らず、五六月の交、時として九十度より百數度に至ることあり、地質卑濕にして瘴氣烈しく甚だ健康に適せずと雖も風土に慣熟すれば敢て堪へ難からず

人情　は機敏活潑を尊び、善く勞に堪へ難を忍び、毫も因循遲滯の憂なく、南洋、印度、日本、濠洲、亞米利加に渡航して商業を營み勞働に服するは本港人を多しとす蓋し支那人中最優等の人民なり、其風俗は一種の特色を有し、婦人は纏足の陋習なく又好んで黑衣を着す、其の街巷の如きも陋雜の狀少なく、家屋も亦較々清潔にして巨商富豪多し、唯性頗る狡猾にして言行反覆常なし、

重要輸出品は生絲、絹布、砂糖、藺蓆、陶器、烟草、蜜蠟、藍、麻、麥、米、藥材、木材、石材、琥珀、瑪瑙、銅、石灰、及び諸種の製造品、海產等にして其の種類甚だ多し、輸入品は阿片、棉花、金巾、金屬等にして我國の物產中、海產物、椎茸、玩弄品、日用雜貨、棉布等年々其の數を增加す

梧州

梧州府は廣西省蒼梧縣にあり、即ち漢の蒼梧、交州、宋、元の梧州にして明及び清は之を梧州府と爲せり、

桂江は桂林府より來り、鬱、黔二水を合して一大江となり、廣東に至りて海に入る、

藤江は交趾より來り、繡江と合して廣東に至る、二江の岸、鰐魚多しと云ふ

蒙自

蒙自は雲南省臨安府に屬し、蒙自縣城の在る所にして、盤江の上流に沿ひ、安南の北境に接せり、此地は海港にあらざれども、河舟の便あるを以て佛國と特約し、佛領東京との陸路貿易地と定めたり、年々進歩の運にありと云ふ

長崎より支那

我國より支那に向つて渡航せんとするものは、横濱、神戸、下の關等、乘船の場所は獨り長崎に限らずと雖も、内國の航路は人も熟知し案内書にも乏しからざるを以て、假りに長崎を以て支那渡航者の起點とすれば、南清に赴くものは此處より、先づ路を上海に取り、四百五十海里の波濤を越ゆざるべからず、此間二晝夜を要す、北清に至らんとするものは路を天津に取らざるべからず、此間七百海里、約三晝夜を要す、而して後は北京に至り、北京より各所の道程は以下記する所に據りて畧々其概要を知ることを得べし

日本郵船會社賃金

	一等	同往復	二等	同往復	三等
長崎上海間	二十四圓	三十六圓	十五圓	二十二圓	六圓
長崎太沽(天津)間	五十五圓	九十九圓	三十八圓	六十八圓	十四圓

北京より保定府

保定府は直隸省城の在る所にして、北京より我四十八里あり、今は滊車の便あれども昔時に於ても此道路は平坦にして常に修理を加へ、道傍に溝洫を通ずるを以て雨潦に際するも車行に困難することなりき、加ふるに田野開け鎮市整ひ、西の方三里を隔て〻丘岡連りて路と共に南西に併馳し、夏期は高粱高く翠頃天に接す、河流は盧溝橋に永定河あり、良鄉縣と濠州の間に拒馬河あり、定興縣に易水あり風、瀟々として感慨寒きの處、其他安肅縣と保定府の間に漕河あり、漕河と永定河は能く舟を通ず

北京より濟南府

濟南府は山東省城の所在地にして、北京より此處に至らんと欲せば先づ固安縣より雄縣に至り、正南に向ひ河間府に至り景州德州を過ぎ再び東南に轉じ、平原、禹城、齊河等の諸縣を經て黃河を渡りて往く、里數は百十七里、此間濠州より南進して白溝店に至れば易水と白溝河の合流点にして人烟多く、雄縣と任邱の間には趙北口と稱する地ありて古燕趙の疆界と唱へられ、白洋淀中の道路を歩し石梁を蹈み、淀中の漁艇に接して鴨鴈の游泳を臨み心神をして轉た清爽ならしむ、河間府附近は總て滹沱河の氾濫に遭遇して處々に沙丘を爲し一望の荒涼靑草を見ず、既にして山東の城内に入り德州の熱鬧に宿して名所舊跡を吊ふも亦興味淺しとせず

北京より太原府

太原府は山西省城の在る所にして、北京よりするに二道あり、一は滊車にて保定府より定州を經て正定府に至り、此處にて滊車を下り道を正西に轉じ井陘口を過ぎ、壽陽楡次等の諸縣を經過するものにして里程百七十六里あり、一は先づ涿州に至り西行して易州を過ぎ紫荊關を越え長城外に出で、直隸山西二省境界の山嶺を踰ゆ、平荊關を過ぎて再び關内に入り代州忻州を經過するものにして里程百五十四里あり、第一道の正定府に至るまでは四望遼濶、衰艸曠野に迷漫し、耕田は概に五分の一と稱せらる

獲鹿縣より山路に入り愈々進めば彌々高く人馬皆羊腸を辿りつゝ行く、白石嶺に關門あり東天嶺と額書す、之より以西、道路險惡攀登し易からず、沿道遙房多く穴居の風習依然たり、所謂遙房とは山腰を穿ち屋形を爲し、二三間より或は十餘間に至り、前面に軒窓門戸を設け、屋内は地に磚を鋪く、黑暗にして日光を導かず獲鹿縣より鳴謙驛に至る間も亦山路崎嶇殆んど行き難しと雖も素より西に向つて太原に赴くの大道は稍々平坦なり

北京より西安府

西安府は陝西省城の在る所にして其の大要は古への長安を題して記述せるが如し、北京より此處に至らんには山西省の楡次縣屬の鳴謙驛より汾水の東岸に沿ひ西南に向つて進み平陽府蒲州府等を經へて黃河を渡り、潼關に入る、士卒何ソ草々タル、築レ城ヲ潼關ノ道、大城鐵ヲ不レ如、小城萬丈餘、借問ス潼關吏、修メ關ヲ還備フ胡ニ、要レ我下レ馬ヲ行、爲レ我指ス山隅ヲ、連リテ雲ニ列シ戰格ヲ、飛鳥不レ能レ踰ルヿ、胡來但自守、豈復憂ニ西都ニと云ふの所是なり之より渭水の南岸に沿ひ西進して西安府に達す、里程三百六十五里

鳴謙驛より南し徐溝縣近傍の官道は平坦にして田野遠く開け隴畝溝渠極めて整齊し人烟亦少からず、之より平陽府の間に炭礦多く、土人は石炭を以て新炭に代用せり、蒲州府の東數里に盬地あり、附近の府縣に供給せり、河黃に至れば渡船あり、河の幅員凡そ十二三丁あり、河南は即ち潼關廳にして街衢通達、賣買繁盛、百貨輻湊す、渭水より往來するの舟皆此處を以て互市場とす、潼關より華州を經て西安に至る迄は旅客多く沿道未だ寥落に至らず道路も亦山西の如く高嶺峻阪あるにあらず

北京より蘭州府

蘭州府は甘肅省城の所在地にして北京より道程五百六十五里あり、順路は先づ西安に至り咸陽に達し道を西北に取りて乾州邠州涇州平凉府等を經過して行く、而して其の邠州一帶の地は風光秀媚烟樹分明にして山水の景致に富み、路傍若くは山坡に培殖する梨棗柿の類其の幾萬株なるを知らず、陝甘の疆界より西北甘肅の域に入るや路傍に

柳樹を列し綿々脉々直に蘭州府に至る、輓近陝甘総督たりし左宗棠の植移する所、行旅爾來迷津の歎を免る

北京より成都府

成都府は四川省城の所在地にして北京より六百八十七里あり、先づ山西省を經て西安に至り、咸陽より道を西南に取り渭水の北岸に沿ふて鳳翔府に至り、再び西南に向ひ大散關を過ぎ、漢中の諸縣を經て寧鬼州より四川省の域内に入り、劍閣の險隘を越へ白水江を渡り、劍州、綿州等を過ぎて成都府に達す、西安より此處まで役夫一名の賃銀六両となす、其他毎三日酒錢五十文を與ふ、又秦嶺、鳳嶺、鷄頭關、牛頭山の四大嶺を越ふるときは別に毎回五十文の酒錢を與ふるは蜀道往來の舊規なりと云ふ、白樂天の詩に雲棧縈紆登二劍閣一と云へる棧道は、陝西省の鳳翔府所屬の益陽鎮より本省の梓潼縣に至る間にして、益陽鎮より褒城縣に至る八十一里、之を秦棧とも北棧とも稱し、褒城縣より梓潼縣に至る百二十一里を蜀棧とも西棧とも稱す其間群峯重疊して溪水流れ乱石横はり到る處嶮峻を極むと雖も、高きは石燈を數さ危きは馬欄を列し、歴代修治の功、行旅をして障礙なからしむ

北京より開封府

開封府は河南省城の所在地にして北京より三百二十二里あり、順路は正定府の恒山驛より正南に行き、趙州順德府を經て河南省の域内に入り彰德府を經て衛輝府に至り、再び路を南方に取り延津縣を經て黄河を渡るにあり

北京より安慶府

安慶府は安徽省城の在る所にして北京より三百六十六里あり、順路は山東省濱州府より江蘇の徐州府を經て安徽省に入り、定遠縣より道を西南に取り廬州府より南行するにあり、元來此省の北部は淮水の水域に隷し、南部は楊子江の流域に屬し、其支流の縱横する所、舟楫を通濟すべきもの多く之に反して陸路は平野の中に在るも狹少低濕

行旅甚だ艱難なり、官道站驛亦荒涼を免れず

北京より南昌府

南昌府は江西省城の所在地にして、北京より四百五十二里あり、順路は北京より先づ安徽の廬州府に至り潛山縣を經て湖北省の城内を過ぎ江西省内に轉じ、楊子江を渡り九江を過ぎ、鄱陽湖の西岸に沿ふて南進し、南康府より南昌府に達す、廬州府より楊子江の北岸に至るまでは道路丘陵に屬すれども、江を渡りて九江府より本府に至る迄の間は土地平坦にして四望快濶、眼界廣し、九江の西に方りて廬山の雲表に秀でたるを見る、道を爽みて左右に水田乾田相交はれり

北京より武昌府

武昌府は湖北省城の所在地にして、北京より四百里あり、順路は河南の衛輝府より道を西南に轉じ黄河を渡り榮澤縣より鄭州、許州を過ぎ信陽州に至り湖北の德安、漢陽

の二縣を經て大江を渡ると、一は道を開封に取り許州を經て汝寧府に至り羅山縣より湖北の城内に入り黄安、黄陂の二縣を經て漢口に出で武昌府に達す、衛輝府より延津縣の北關に達する十一二里の間は土質輕沙にして車輪を沒する尺餘に至る、其外左右所々に沙丘ありて矮小なる灌木繁茂せり、黄河附近の人家は總て堆積せる土上にあり開封府より南、羅山縣に至る迄は總て平原にして四望山を見ず、田野遠く開けたれども羅山より湖北の界に入りて地漸く山坡となり、黄安縣より五雲山の嶺を越へ黄坡縣に至る、此より地勢低卑にして漢口に達す、漢口附近は夏期楊子江の積漲するに至れば所在江流瀰漫し多くは舟楫を以て通行するに至る

北京より長沙府

長沙府は湖南省城の所在地にして、北京より五百五十里あり、武昌を經て楊子江の南岸に沿ひ岳州に至り洞庭湖の東南を南行して湘陰縣に至り湘江の東岸に沿ひ南行して此處に達す、此處は水利を占ひるを以て貿易頗る盛にして内地産物の輻湊とも云ふべ

し、水路は楊子江より岳州を經て洞庭に入り湘水を泝りて長沙に達す、湘水上、女蘿衣、白雲堪ヒ臥君早歸ヒ。

北京より江寧府

江寧府は江蘇省城の所在地にして、北京より三百二十二里あり、山東省德州に出て〻道を高唐州に取り、滋州、徐州、鳳陽の諸府を經て江心驛に至り東南に轉じて滁州を過ぎ江浦縣より長江を渡る、途次德州、滋州等の市街は曲阜の孔子廟、鄒縣の孟子廟泰山等に參拜するもの多きを以て春秋の候は殊更行人絡繹たり、此より徐州府に至るの間は利國鎭を以て繁昌とす、鎭は微山湖の東岸に瀕し水路の便を占ひ

北京より蘇州府

蘇州は北京を距ること三百八十三里、北京よりの順路は先づ山東省齊河縣より道を正南に取り泰安、泝州を過ぎ、淮安より運河に沿ひ楊州府に至り楊子江を渡り鎭江、常州を經て至る、長江と蘇州の間は旅客も貨物も総て便を運河に依る、滊船も日夕往復せり

北京より杭州府

杭州府は浙江省城の在る所にして、北京より四百三十八里あり、其の順路は蘇州より運河に沿ひ南行するにあり、蘇州、杭州間は交通最も便なり、而して沿道総て沃野にして桑田棉圃相接し景狀既に殷富を表して餘あり

北京より福州府

福州府は福建省城の所在地にして、北京より七百里あり、杭州府より錢塘江の北岸を溯り西南に進み嚴州府を經て錢塘江を渡り衢州府を過ぎて有名なる仙霞嶺を越ふるなり、仙霞嶺は浙閩往來の要衝にして浙江より福建に至らんとするには何れの地よりするも此山嶺を陟らざるを得ず、嶺上の東西に六關あり、皆險隘にして騎相並ぶこと

能はず、此嶺を除くの外、大抵水路に依ることを得、嶺を過ぎて建寧府に至り延平より閩江の北岸に沿ふて福州に達す

北京より廣州府

廣州府は廣東省城の在る所にして蘇州、杭州、福州等と同しく開港場たるを以て市街の狀況は別に記述する所の如し、此地は北京を距ること八百二十里にして、北京よりの順路は山東江蘇安徽の三省を經て江西省の建昌縣より道を西方に取り、奉新縣より南方に向つて進み、瑞州、吉安等の諸府を過ぎ大庾嶺を越へ南雄州及び韶州府を經て廣州府に達す、其間吉安、贛州間に十八灘ありて最も險と稱せらる、大庾嶺は江、廣の境界となり又南北を劃する一大分水嶺にして秦漢以來の古道たり、其嶺上を梅關と稱す

北京より桂林府

桂林府は廣西省城の所在地にして、北京より六百九十八里あり、順路は湖南省の長沙より南行して湘水を渡り、其の西岸に沿ふて再び南進し、衡山の西麓を過ぎ、衡州、永州等の府を經て、廣西省の域内に入りて桂林府に達す、其間衡州の前一里にして湘江に會流する來陽河あり、急湍、旋渦を爲すと雖も、附近に產出する所の石炭を運送するに皆此河流に依れり、永州以向は山嶺多く道路漸く險なり、全州、興安の間に廣西の要衝たる嚴關あり

北京より貴陽府

貴陽府は貴州省の首府にして、北京より六百九十六里あり、順路は河南省新鄭縣に出で〻道を西南に取り、禹州、裕州等を經て、南陽府に至り、再び西南に向つて進み、湖北省に入り襄陽、荆州を過ぎて江を渡り湖南の常德府に至り、阮水を渡り晃州廳

を過ぎ貴州の域内に入り、鎮遠府平越州等を經て貴陽州に達す、其間湖南の常德府より辰谿縣に至る五十里の間は阮江に浮びて往來するを得、水流矢の如く所々に急灘あり雖とも旅客之に依るもの多し、貴州の域内は山路崎嶇として兩轎並び過ぐること能はず、黄平州より凡そ三里にして黄猴塘と稱する所あり、江流の廣さ十丈ばかり、兩岸は石崖叢立して劍峯の如く上に鐵索橋を架す、貴州第一の險要と稱せらる、此黄平より貴州に至る二十四五里の道程は皆險なり、阮州府近傍は婦女多くは役夫となり、肩背に竹筐を負ひ、物を其内に盛りて行く、鎮遠以西は漢苗兩民族の雜居する所にして脚夫の多くは苗民に係る

北京より雲南府

雲南府は雲南省城の所在地にして北京より八百四十里あり、順路は貴州府の貴陽州に出で西南に進みて安順府、普安廳を過ぎ、雲南省の域内に入り曲靖府を經て行くべし道路驛站概して山間石隙の中に在りて嶮峻なること支那本部中屈指の難所と聞ふ、然れども貴陽以西は之を其東に比すれば平夷にして安順府の如き、繁盛省中第一と稱せらる、普案廳に至る迄に鴛嘴殿と云へる險要あり、此險は屏崗絶嶺、僅に一棧の鳥道を通じ、峻阪空を凌ぎ天梯倒懸の狀あり　螺旋して登り愈々登れば愈々危し、處々に設けたる石棧の長さものは二千餘級に及ぶものあり

北京より奉天府

奉天府は滿州の首府にして北京より凡そ二百里あり、先づ北京城の朝陽門を出で通州蘇州永平府を經て山海關より盛京省の域内に入り寧遠州錦州府を過ぎ白旗堡驛を越え盛京站に達す、今は滊車の便あり、往復極めて便なり、山海關以往は土地都て波瀾地にして高きに登れば數里一望の下にあり

北京より庫倫

庫倫は蒙古の都府にして、北京より凡そ三百三十里餘あり、順路は北京の北西なる昌

平州宣化府等を經て、張家口より長城を出で、察哈爾の牧羊地に至り、此より內蒙古蘇尼圖部を經て沙漠を渉り、外蒙古の車臣汗部に至り庫倫に達す、其間に休憩する處四十七あり、此邊は西南部の如く全く不毛の赤地にあらずと雖も、無限の曠原にして四邊天と連り只沙丘の高低起伏するのみ、沙漠を過ぐるに凡そ十數日を費すも目に觸る風物一も異るものなく、日落ち夜黑く數千の星光燦爛として天穹に懸るを望みて帷幕の下に困臥するのみ、薪水なくして空しく携帶の食料に依るの外なきを以て旅客をして轉た厭倦の心を生せしむ、砂漠の北端より漸次高く庫倫附近に至れば四千二百尺に及べり、此間牧草の繁茂せる廣野にして地質は砂と粘土とより成れり、庫倫には三万余の人口あれども其三分の一は僧徒なりと云ふ、庫倫を二區に分ち一は支那官吏の居る所、一は蒙古人の居る所とせり、其蒙古區には巨大なる佛閣と胡土克圖の宮殿とありて蒙古中の靈場にして土人の尊崇する所たり

北京より伊犂

伊犂の惠遠城は北京より凡そ九百里あり、先づ路を甘肅省の蘭州府に取り西北に向つて涼州、甘州の二府を經て嘉峪關を出で沙漠を渉り哈密に達し、道を天山北路に取り巴里坤、古城、等の各地を經過して惠遠城に達すべし、嘉峪關は甘肅の北口にして關外の安西州は沙漠中の一府たり、此沙漠は凡そ百三十里の間、人烟を絶ち水草に乏し哈密は伊犂全部の門戸にして行商駱駝常に出入し、百貨輻湊の都府なり、天山南北の兩路は此處より分れ、絶高なる山道を踰えて巴里坤に至るなり、巴里坤は天山の北に位するを以て寒氣殊に甚しと云ふ、此より以西多く高山峻嶺の中に在り

北京より西藏

此間の全長距離は凡そ千七百余里あり、先づ路を四川の成都府に取りて西の方打箭爐に達し、裡塘、巴塘、等を過ぎ西藏の域內に入り、察木多拉里の地を經て西藏の首府

なる拉薩に至る、成都府より此處まで凡そ千零三十里餘あり、其間成都より起りて象嶺を踰え清溪を過ぎ、羊腸の山路を辿りて打箭爐に至れば邊陲の景況漸く加はり、鴉礱江を渡り裡塘の界に入れば深林密生して人跡甚だ稀なり、雪山を踰ゆれば陵谷深邃を極む、裡塘は漢夷貿易の處にして市店交錯せり、糧を齎らして巴塘の界に入る、巴塘は土地饒美にして亦漢夷雜居せり、既にして金沙江の上流を渡り、新龍山を越え千秋の積雪を踏みて察木多に達す、此處は西藏の南疆にして土人甚だ淳厚なり高峻なる瓦合山は百折して上下せざるを得ず、山頂に湖水あり烟霧常に迷漫たり、冬期積雪に際すれば竿を處々に立てゝ行旅の目標とせり、此より碩板多に至る數十里の間は山中に鳥獸棲まず人烟空しく四時通じて寒冷とす、碩板多は物産に富み人民も多く市街稍々見るに足る、拉薩は土地平坦にして道路四通し、郡山圍繞し、衆水環流し、實に西方の勝地たり、（甘肅の西寧府より青海を經て拉薩に通ずるの道路別にあり凡そ八百餘里なりと云ふ）

鐵道と郵便電信

將來清國内地の富源を開發するには必ず鐵道に由らざるべからず、北部に於ては英人の手によりて着々敷設せられ、北京天津間の八十哩、天津太沽間の二十七哩、太沽より百四十七哩山海關に達し、更らに海岸に沿ふて百十三哩錦州に至り、遼東海岸は營口に至りて彼の西比利亞大鐵道の滿州支線に連續す幹線の全長九百五哩、北京と保定間の八十八哩は既に開通し更らに延長して漢口との聯絡を來すの日あるべく、其他廣東鐵道は米人の手に、長江鐵道は英人の手に上海、杭州、寧波、温州、成都、梧州鐵道も亦同しく、佛人は蒙自、梧州、北海、雲南及び東京間の聯絡を計らんとしつゝあり

郵便事務は郵便車、配達夫等の都合によりて軍機大臣の官下に屬し、十八省中、大小局二萬四十あり其外私立郵便御用あり、大清郵政局は千八百九十七年二月の新設にかゝり、總稅務司之を管理せり

電信は各方面に架設せられたり、北京天津間を始めとして北京滿州黑龍江、烏蘇里の間に架せられ、牛莊、上海、楊州、芝罘及び楊子江岸の七條約港、廣東、梧州、龍州、等國內重要なる都會、首府は皆電信に依らざるなく、廣東より西して雲南に至り更に緬甸の國境に至るもの、上海、福州、寧波等の海岸を走りて遠く楊子江岸に至るもの等其數數ふべからず、又中央亞細を經て、北京より歐羅巴に至る一線も開通せられたり

清國遊歷案內終

明治三十五年九月廿五日印刷
明治三十五年九月三十日發行

不許複製

著作者　山口勗
發行者　大阪市東區安土町四丁目卅番邸　石塚猪男藏
印刷者　大阪市西區阿波座壹番町六十番屋敷　大阪製本印刷株式會社代表者　矢野松吉
發行所　大阪安土町心齋橋東へ入　石塚書店　〔電話東二〇二四番〕

82
524